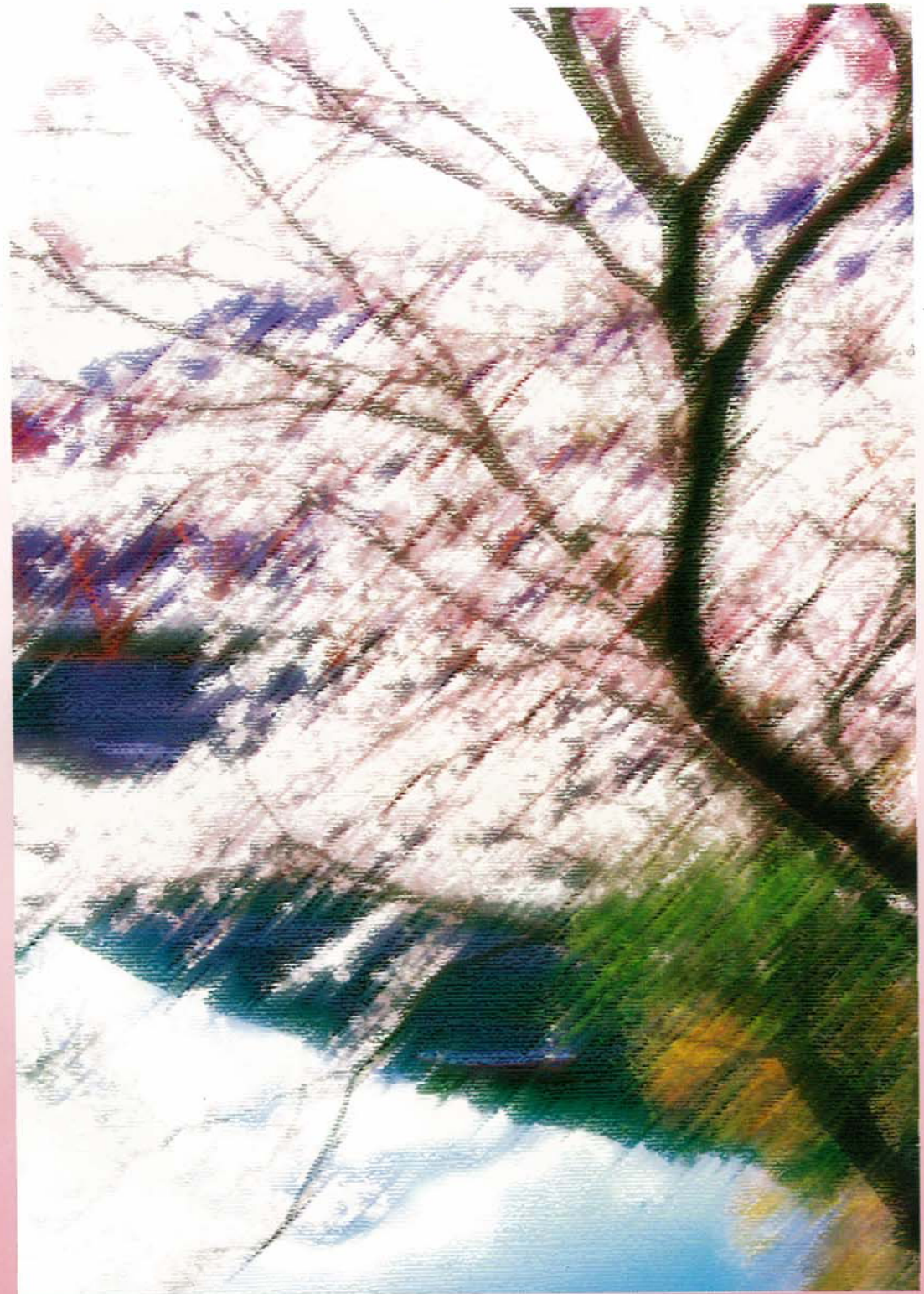




21世紀へのメッセージ“それは川から始まる”

第8回全国川サミット in 肱川

記録誌



第8回全国川サミット in 肱川

記録誌

- 編集／全国川サミットin肱川実行委員会
- 発行／全国川サミット連絡協議会・愛媛県肱川
- 主催／全国川サミット連絡協議会・愛媛県肱川
- 後援／建設省・愛媛県・肱川流城市町村



21世紀へのメッセージ“それは川から始まる”

第8回全国川サミット in 肱川



記録誌



発刊にあたって

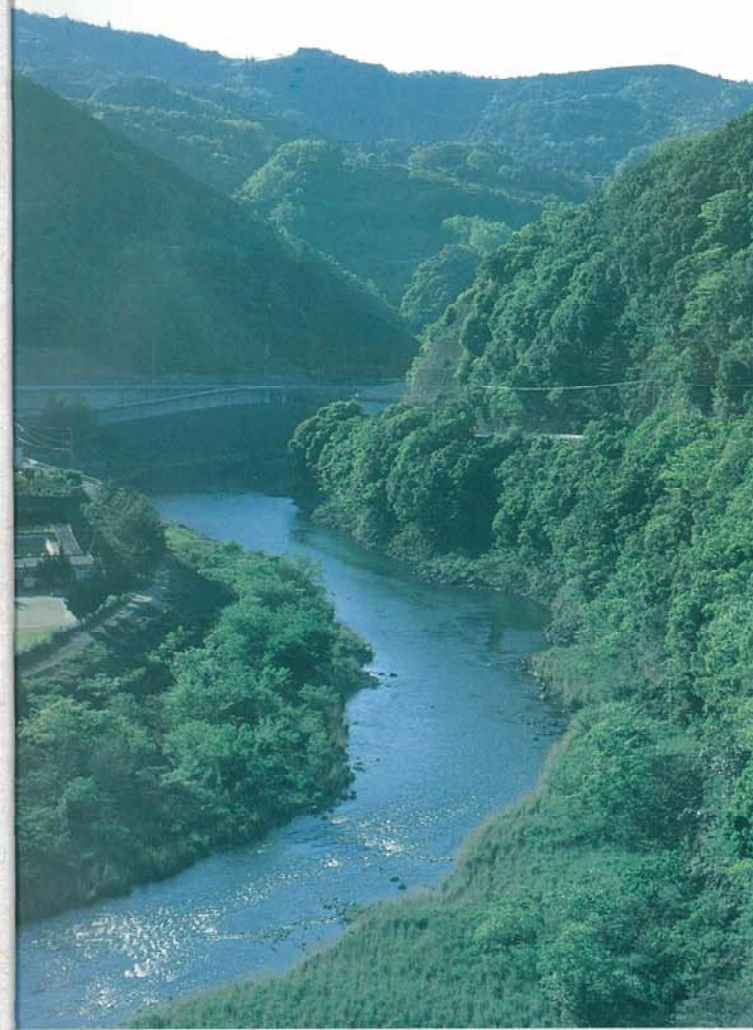
全国川サミット連絡協議会会長
肱川町長 大野 和

第8回全国川サミットin肱川を開催いたしましたところ、全国各地より大勢の皆様にご参集いただき、盛会にそして実り多き大会として実施できましたことを厚く御礼申し上げます。

この冊子は、「21世紀へのメッセージ、それは川から始まる」をテーマに開催いたしました3日間の大会の記録集として作成いたしました。

本大会では、ご参加いただきました皆様方より、21世紀に向けたあるべき自然との共生や都市と農山漁村、また流域のよりよい環境づくりに様々なご提言をいただきました。シンポジウムを軸とした大会ではありましたが、今後の河川への取り組みに対するメッセージが集約できたものと感じております。本誌を手がかりに今後ますます具体的な取り組みのステップにしていれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本大会に対しまして、ご指導ご協力を賜りました建設省、愛媛県、流域市町村、各関係団体、そしてボランティアの皆様方に心よりお礼申し上げますとともに、関係各位のますますのご発展をお祈りいたしまして、発刊のご挨拶といたします。



目次

CONTENTS

発刊にあたって	2
目次・コンセプト	3
第8回全国川サミットin肱川記録写真集	4
第8回全国川サミットin肱川プログラム	8
主催者挨拶	10
来賓挨拶	13
川の原簿整備事業成果発表	18
基調講演	20
パネルディスカッション	30
第8回全国川サミットin肱川宣言文	50
参考資料	53
参加自治体17の河川	55
フォトコンテスト、作文、エッセイ入賞者	56
新聞掲載記事	57

21世紀へのメッセージ

“それは川から始まる”

昔から人々は、川からの様々な恩恵を受けながら、また川の脅威と闘いながら暮らしてきました。

近年、人々は、経済成長とともに下流域に広がる沖積平野に都市を形成し、人口と資産を集中させてきました。この急速な都市化に対応するため、近代河川行政では、都市中心の治水および利水事業が展開され、都市の人々の生命や財産を守り、都市振興に寄与する基盤整備として大きな成果をあげてきました。

しかし一方で、都市社会を中心とした効率優先、経済偏重の考え方は、「川」本来のあり方を変え、環境資源の荒廃、都市と農山村の経済格差の拡大、流域の意思の隔たり等、社会の歪みが生じたことも事実です。

このことを踏まえ、今回のサミットでは一級河川肱川に焦点を当て、「川」がもたらした恩恵と脅威、開発の歴史から川の持つ役割を認識し、21世紀に向けたあるべき自然との共生や都市と農山村、また流域のより良い関係づくりを様々な人々とともに考え提案する場にしたいと考えました。

全国川サミット 連絡協議会 総会



歓迎会



肱川町交流促進センター鹿野川荘



長浜町豊年おどり

流域視察



移動バス車中



野村ダム

流域視察



河川環境視察



鹿野川ダム



大洲平野の商業集積地視察

シンポジウム



シンポジウム



開会宣言



来賓挨拶 愛媛県副知事 前田瑞枝



会長挨拶 肱川町長 大野 和



来賓挨拶 建設省河川局長 竹村公太郎



参加自治体スライド紹介

シンポジウム



川の原簿整備事業成果発表



基調講演 関東学院大学教授 宮村 忠



パネルディスカッション



シンポジウム会場



フォトコンテスト入賞者表彰



サミット宣言

交流会



四国地方建設局大洲工務事務所長 藤原 要



風の博物館にて



伊予万歳

交流会



伊予万歳



川や水のある風景 フォトコンテスト展



一級河川鮎川の氾濫パネル展

関連事業



ドラゴンボート大会での流域物産展



川の原簿展示コーナー



ドラゴンボート大会



川の原簿展示コーナー



ドラゴンボート大会

PROGRAM

第8回 全国川サミットin肱川 プログラム



【1日目】10月15日(金)

時刻	プログラム
15:40	受付
16:30	平成11年度全国川サミット連絡協議会総会
17:30	会場移動
18:00	歓迎会
20:00	宿泊施設への移動

【2日目】10月16日(土)

時刻	プログラム
8:30	肱川流域視察
12:00	昼食
12:00	受付
13:30	全国川サミットin肱川シンポジウム
14:00	参加自治体スライド紹介
14:20	川の原簿整備事業成果発表
14:30	基調講演
15:30	パネルディスカッション
17:10	表彰(フォトコンテスト・作文・論文)
17:30	サミット宣言
17:40	川サミット旗受渡式
17:50	閉会
18:00	会場移動
18:00	受付
18:30	交流会
20:30	宿泊施設への移動

【3日目】10月17日(土)

時刻	プログラム
8:40	(ケース1)ドラゴンボート大会視察
9:00	(ケース2)解散

〔開会宣言〕



肱川町助役

森 繁

本日は大勢の皆さん、よくお越しをいただきました。本当にありがとうございます。

21世紀へのメッセージ“それは川から始まる”のキャッチフレーズによりまして、第8回全国川サミットin肱川の諸行事をただいま行っているところでございます。

昨日の15日には北海道の鶴川町を初め、南は宮崎の北川町まで17の関係自治体の皆さんがお集まりいただきまして、総会を行ったところでございます。

本日はメインのシンポジウムでございます。明日はまた記念といたしまして、ドラゴンボートを鹿野川湖で行うようにいたしております。どうか皆様方、また大勢のご参加をお願い申し上げます。

この川サミットにつきましては、建設省並びに愛媛県、大洲市を初め流域市町村の皆さん、それから関係報道機関の皆さんの大変ご協力を得まして、このような運びとなったわけでございます。心から厚くお礼を申し上げます。

ただいまから全国川サミットのシンポジウムの諸行を事行っていきたいと思っております。最後まで皆様方の温かいご協力を賜りますよう、心からお願いをいたしまして、開会のご挨拶といたします。ありがとうございました。

〔主催者挨拶〕



肱川町長

大野 和

肱川町長の大野でございます。今回第8回の全国川サミットを肱川町で開催する運びとなったわけですが、町内外の多くの皆さんがこのようにたくさんお出でをいただきまして、サミット関係市町村の皆さんもたくさんご参加をいただきまして、このように盛大に開催できますことを大変うれしくありがたく思っております次第でございます。

ご来賓として前田副知事さん、竹村・本省河川局長さん、非常にありがたいご来賓のお出でをいただきますし、その他大勢の皆さんにご参加をいただきまして、大変ありがたく感謝をいたしておる次第でございます。どうもありがとうございます。

一級河川名を市町村名としております市町村が相図りまして、毎年川サミットを実施してまいったわけでございます。今年は17団体ご参加をいただきまして、開催をいたしております。昨日は総会を実施いたしまして、今日の午前中は流域の視察をしていただきました。そして今ここにシンポジウムに入るわけですが、私たちは非常に川につきまして、いろんな心配もいたしております。そしてまた私たち人類の

歴史の中において川が果たしてきましたいろんな役割についても、いつも感謝をし、いろんなことを考えておるわけでございます。

サミットに参加していただいております各団体の皆さん方は、そのへん大変関心を持っていただいております。それぞれの市町村でそれなりの努力をいろいろ重ねてきていただいております。そのようなことをご発表いただき、いろいろ学習もし、示唆も受け、そして我々の行動に結びつけていきたいというふうなことでやってきておるわけでございます。

流域外の皆さんも多数お出ででございますので、最初に肱川の特長と申しますか、肱川という川について若干お話をさせていただいたらと思うわけですが、

第一番に水源が宇和町正信ということになっております。それと正信と長浜の河口の距離は、直線距離でいきますと18kmでございます。河川の距離は103km、ですから、非常に迂回をして河口へ至っております。坂石のあたりでぐっと肘を曲げたように直角に曲がっておるわけですが、それが河川名の由来ではないかというふうなことも言われております。

いま一つは、肱川の支流は474というふうなことに言われておりますが、全国で第5番目に支流の多い川だということになっております。ですから、簡単に言いますと、山の多い地域であるということが言えると思うんです。肱川町も山と谷の町であります。支流、細流によりまして土地が分断をされておまして、いろんな生産・生活の条件に厳しさがあるわけでございます。

第三番目に私が申し上げたいことは、川は大体源流から流れて行きまして、順々に大きくなってまいります。そしてまた平らかな土地もつくってきておるわけでございます。大体扇状的に広がりますし、三角州でありますとか、河口のほうに開けた土地をつくっていくというのが普通であろうかと思えます。

しかしながらこの肱川が一番源流であります宇和平野が一番広いんじゃないかというふうに思っておるんですが、私、数字は見えておりませんから私の印象でございますが、宇和平野が一番広いと、一番奥が一番広いと。それから野村盆地があり、大洲盆地があり、内山があるというふうな、ややなだらかなところがあるわけですが、長浜へ入りまして河口の10kmぐらいは非常にV字の狭窄状態にあります。

でありますから、これは雨が降れば洪水は避けられないという、川自体がそういう宿命を持っております。それも大きな特徴であります。

その次に勾配のことを一つ加えたいと思うんですが、源流から河口に至ります川の勾配というのが非常に緩やかでございます。430mの標高から0mへ流れて行っております、勾配が非常に緩やかです。それで河口から50kmまでかつて船便が往来しておったわけです。こういう川も全国ではあまりないんじゃないか。途中いろいろ船運が開けておる川はあるわけござい

まするが、河口から50kmの船運が開けておったということは、一つの特徴ではないかというふうに思っております。

そういう特性があるかと思っておりますが、そういうことのいろいろな影響を受けて、私たちは生活の歴史を築いてまいりました。そして、一般的にも人間が川からいろんな恩恵を受けて生活をしてまいったわけでございますし、また一方では洪水でありますとか、渇水でありますとか、いろんな影響を受けてきておるわけでございます。

そういうことでございますが、最近環境問題が非常にやかましく言われますし、また川自体の状況が非常に素人がみましても、難しい問題を含んでおるんじゃないかというふうな感じを強く受けておるわけでございます。そういうことでサミットをいろいろやっております。そしてまたかつて川はいろんな交通運輸の動脈であったわけですが、今それがなくなってきたおります。

いろいろ細かい話は省かせていただきますけれども、川と人間との関わりが非常に薄くなってしまっておるわけでございます。そしてまた、流域というものが非常にかつて道路がない時代には、流域と言う言葉に非常に大きな意味があったわけでございます。それが今は人間が川から遠ざかりましたから、流域という意味合いも非常に薄くなってまいりました。近い他人になってしまっておるような感じがいたします。

ですから、今、流域をつなぐものは何かということも、ひとつ考えたい。そしてまた川、自然、こういったものは私たちみんなが生きていく上に必要なものであるわけでございますが、これらのコスト負担はみんながあまねく持つべきである。森林交付税運動を私たち今進めておりまして、来年の2月には愛媛県で全国大会を

開催するような運びになっておりますが、やはり我々だけで山村のものだけで森林を、川を守っていくことは出来がたいというふうな状況になってきております。そういうことでそういう運動もやっておりますが、そしてまた利益も、共通の財産であるとするならば、利益も共通にみんなに配分をすべきであると、こういうふうには思っております。

それやこれやで、私たちは川に対しまして非常に関心を持っておるわけでございまして、お集まりをいただきました皆様方も、そういうお気持ちを強く持っていていただいている方々であろうと、私も思っております。いろいろこれから私たちはこのサミットを一過性のものでなく、

何かこの機会に生かしたいということで、この機会に肱川町の「川の原簿」というものを作成しましたので、後ほどまたご説明を申し上げますが、そういうことでございますし、またこれからの行動の原点として頑張っていきたいと、さように思っておる次第でございます。

ひとつこれから後のいろいろな行事につきまして、よろしくお願いを申し上げまして、また建設省、県、そして関係地域の皆さん、大勢の方々のご支援をいただきまして、立派にサミットができるようになったわけでございます。

厚くお礼を申し上げまして、開会のご挨拶といたします。



〔来賓挨拶〕



愛媛県副知事

前田 瑞枝

皆様こんにちは、ちょうど加戸守行知事が現在中国の大連に出張いたしておりまして、不在でございます。したがって大変恐縮でございますが、私、副知事の前田でございますが、知事のお祝辞を代読させていただきます。

祝 辞

本日は建設省河川局長を初め、多くの方々をお迎えして、第8回全国川サミットin肱川が盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げますとともに、遠路ご来県いただきました皆様方を歓迎いたします。

さて、一級河川肱川は肱川あらしや、鶺鴒といった美しい自然・風物と、優れた文化を育み、また主要な交通路として人々に利用されるなど、流域に豊かな恵みを与えてまいりました。

しかし、一方では度重なる氾濫により、住民の生命や生活を脅かしており、特に平成7年7月の梅雨前線豪雨では、家屋や農作物などに大きな被害をもたらしました。

このため、国におかれましては、同年9月に激特事業に指定し、鋭意事業の推進に努めていただいております。深く感謝申し上げます。

また、県といたしましても、水資源は150万県民が使うものであるという大局的な観点に立って、流域の方々のご理解をいただきながら、現在、肱川流域に山鳥坂ダムの建設を進めているところでございます。

私どもは今後とも治水や利水を通して川と真剣に向かい合い、川と人との良好な共生関係を探っていかなければならないと考えておりますが、このようなときに、一級河川名を名前に持つ全国の自治体の皆様方が、愛媛に一堂に会して、川サミットが開催されますことは、大変意義深いことと存じております。

“真の文明は山を荒らさず川を荒らさず”という言葉があります。どうかこのサミットが川の恩恵のもとに、地域に根ざしてきた生活や文化ついで、さらに理解を深めるとともに、21世紀に向けて川と人とのより良い関係を探る契機となりますよう、期待いたしております。

なお、遠路ご来県の皆様方には、本年5月に開通したばかりの瀬戸内しまなみ街道をはじめ、県内各地を訪れていただき、深まりゆく愛媛の秋を満喫していただければ幸いに存じます。

終わりにになりましたが、サミットの開催に当たり、格別のご尽力をいただきました関係者の方々に深く敬意を表しますとともに、全国川サミット連絡協議会並びに関係自治体のますますのご発展と、ご参加の皆様方のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして、祝辞といたします。

平成11年10月16日

愛媛県知事 加戸 守行（代読）

〔来賓挨拶〕



建設省河川局長

竹村 公太郎

ご紹介にあずかりました河川局長の竹村でございます。

第8回の川サミット開催、心からお喜び申し上げます。大野町長から川サミットをやるので、ぜひ河川局長挨拶してくれと、それもいつも行政で私河川の行政の長でございますので、行政上の話は横に置いておいて、なるべく私個人の何を川に考えてるのかと、どういう考え方で河川の行政に携わっているのかと、そういうところをお話ししていただけないかというお話がありましたので、私もしめしめと思ひまして、堅い話というより私が個人的にどんなふうなことを考えながら、川の行政をやっているのかなということを、ご紹介というかご挨拶に代えさせていただきます。

お手元に資料としてお配りしてございますが、スライドを使って最近の手に面白いデータ等がございましたので、簡単にお話ししながら、その資料は皆様方お役に立ちますので、何かに使っていただきたいということと、私とそのデータでもって考えてることをお話しさせていただきますと思っています。

<スライド映写>

私ども河川局と申しますのは、全国の建設省が管理している109水系の一級河川と、各県が管理している二級河川のすべての川を管理しておりますが、それでは一番目。

◇日本の国土と水害というのは、川というのはどうしても水害というのは避け得ないものなので、一体日本人というのはどういう形でこの国土に住んでいるのかなということで、いろんなデータがあるんですけど、1枚だけについて最近作ったデータをお持ちしました。

これは名前はややこしいんですが、「世界の氾濫区域内人口密度比較」なんて書いてありますけど、要は川が氾濫してしまったところに、川の堤防や海岸の高潮堤がなく、水が暴れまくってしまうところに、人間がどれほど住んでいるのかなというデータでございます。

特に有名なのはオランダでございます。オランダというのは国土が全部海の堤防で守られているわけですが、そこに住んでいるオランダの人々は1km²に510人住んでおります。あの有名なオランダでさえ510人なんですけど、実は日本の洪水に溢れてしまう、黙っていると溢れてしまうところに実は1,551人、全国的に住んでいるというような状況で、世界でも先進諸国でこれほど過酷なところに文明を築いた国はないんじゃないかと。こういう豊富な文明を築いた国はないんじゃないかというのが、世界の日本の今持っている地理的な条件をあらわす1枚のデータとしてお話申し上げます。

◇最近なんですけど、1時間雨量100mmと申しますと、皆さん方ご承知のように1時間50mm

降ると、もう心も体も凍り付くような恐ろしい思いをするわけですが、1時間雨量100mmと申しますと、これはもう天地創造、地球創造のどんでもない雨なわけですが、1時間100mm降った以上の雨が、この平成11年、今年異常に多ございます。これは9月10日までのデータですけど、もう1個実は増えております。最近までは。

ということは、今までは1年間に1個かまたは4個。せいぜい多くても平成10年は4地点だったんですが、今年はもう9地点になっているということで、1時間100mmを降るといふ場所が、これ気象庁のデータです、そういう降る場所が異常に増えているというデータが最近のデータとして、最近の状況をあらわすデータとしてお持ちしました。

◇これは実は日本だけではなくて、世界がどんなふうな状況かなというデータで、誠実な防災白書というところから持ってきたんですけど、1960年以前はちょっとデータが乱れてますので、1960年以降はきちんと世界のデータが集まっていますので、それで調べてみますと、60年代、70年代、80年代、90年代と、死者が1,000人以上になった風水害、これ地震を除きます、風水害のデータとして世界的にも1990年代の世紀末には異常に増えているというようなことがデータとして出ております。

つまりここで話し今までしてきた3枚は、非常に日本というのは水害、または川に対しての脅威というのがあるんだということと、それが実は世界的にも地球の気象の状況というのは非常に厳しい状況になってきているんじゃないか、というような最近のデータがあるという紹介でございました。

◇これは実は自然災害の体験というところで、総理府のアンケートデータでございますが、要は自然災害に皆さん体験したことがありますか、というデータでございますが、半数以上の方がもうすでに被害、または体験をしたことないという日本人が、過半数になってきているというような状況でございます。

ある意味で私どもの、そして今日お集まりの

首長さんたちがきちんと河川の改修、地域の安全を守るために努力してきたことが実っているということが言えるかと思いますが、逆に実は日本というのは非常に過酷な地域にあるのに、一般の方々は意外とそれを忘れて生活しているということで、私ども河川行政をやっている人間は、こういう状況にあるんだということを非常に心に、頭の隅に入れながら、これから災害行政をきちんとやっていかなきゃいけないなという思いで実はやっているんだというご紹介でございました。

◇次にがらっと話は変わらして、これはソニーがつくった「アイボ」ちゃんです。アイボと申しますのは、ソニーが20万円で作りました。ロボット犬です。室内犬です。非常にこれは人気がありまして、20何万するんですけど、何千個つくったか、その日のうちに完売しましたという、大ヒット商品ですけど。このアイボちゃんが非常に今人気なんですけど、なぜ人気かという、まずおしっこをしないと。そして、死なないと。このアイボの一番の特徴はおしっこしない。死なない。そして毛がありませんから、いろんなダニなんかつかない。匂わない。

匂わない。死ぬというのとはちょっと別におきまして、まずこのアイボちゃんが匂わないという、または毛がないので、手入れがいらないということは、非常に今の日本人の象徴かなと思っております。

◇これがつい先ごろ8月、後樂園ドーム球場で全国から5万人の子供たちが、あるゲームメーカーのイベントで集まりまして、このゲームを一生懸命やっているわけです。これがちょっと異常な風景でして、全国から集まったこの会場の中に入った4万人なんですけど、4万人の子供たちが下を向いて、シーンとしてゲームをやっている。これは人類史上始まって以来の異常な私は光景だと思うんです。

子供たち2~3人集まったらうるさくてしょうがないんですけど、この4万人集まった子供たちがシーンとして、みんななるべく体をくっつけないように、自分の空間を保って、一生懸

命ゲームをやっている。

これで言いたいことは何かというと、さっきの「アイボ」と同じように、もう日本人はどんどんどんどん視覚と聴覚、耳と目のバーチャルの世界にどんどんどんどん入り込んでいるということが言えるんじゃないか。

僕たちの人間にとっての五感というのは、残ったのは何かと言うと嗅覚です、匂いですね。それと触覚、さわる、手先の感覚。実は嗅覚と触覚はどんどんどんどん失われている、それが時はバーチャルな世界なわけですが。これから何を言いたいかというと、私どもは河川の行政をやっているときに、この今子供たちが忘れ去られようとしている嗅覚と触覚が実はこの川の中ではあるんだと、厳然として。ということが言えるんじゃないかなと思っております。

人間にとっての五感がすべて総動員して生活していく、五感をすべて総動員して生きていくことが、人間にとっては、動物としては非常に大事なんじゃないかという、私は個人的な、1人の行政官でなくして個人の1つの仮説で持っているんですけど。人間にとって五感が大切だというのは実験できませんので、人権侵害になっちゃいますので。これを動物を使って実験をやった方がいらっやいます。

◇・静岡県農学部の伊藤先生ですが、伊藤先生グループなんですけど。ネズミというのは1回に10匹生みます。ネズミがどれだけ子供た

ちが生存するかという、木製の箱、コンクリートの箱、金属の箱、同じ温度は25度に一定にしたそうです。もちろんエサもきちんとやって、水もきちんとやる。条件が木かコンクリートか金属かというだけの条件の変化でやったところ、木の場合は90%の生存率、コンクリートだと40%の生存率、この金属だと10%を割った生存率だということでございます。

ですから、まだこれも一つの仮説なんですけど、人間にとっての触れる、ですからこういう講堂で木の肌触りというのは、実は僕たちは気がついてないけど、自分たちの命にとってはものすごく重要なことなんじゃないかというように一つの仮説を持っております。

◇・これはつい最近の東京都荒川の「マムシが出るぞ」という看板なんですけど、自然というのは先ほど申しましたように、嗅覚と触覚があるんですけど、人間がコントロールできないものも生きてるんです、その川には。まさにマムシなんです、蛇。そして、ヒルもいるわけです。でもそういう人間がコントロールできない生物がいるということが、実は大事なんじゃないか。そういう例えば、子供たちが川の中に行くときに、マムシがいるんじゃないかということで、棒で突つきながら、そばにそーっと行くというその感覚、それが大事なんじゃないかという、最近私は一つの考え方を持っていて、これから河川行政やっていくとき、どんどんどんど

ん都会化されてる子供たち、バーチャルの世界に今どんどん入っている子供たちを、唯一都会の中で、この肱川のように非常に自然に恵まれたところはいいですけど、大都会の中では唯一自然があるのは、実は川になっております。

いろんな、公園に木が生えているようですけど、あれは人間がつくった空間でして、唯一自然がある空間

というのは川だけじゃないかというような状況に今なりつつあるんじゃないかな。ですから、川というのは非常に人間がコントロールできない生物がいて、予測できない事件が起きる。非常に人間にとっては貴重な空間じゃないかなという思いで川の管理をしていきたいなと考えております。

◇・最後のデータですけど、これは面白いデータでして、木曾川の建設省の土木研究所が自然共生研究センターというところで、川の実験をしました。同じ材料、同じ材質、同じ水を流して、そこに生物がどんなふうに繁殖していくかというデータですが、直線の河川と、蛇行河川ぐるぐる回った河川との、いわゆる魚の数、種類の変化は、直線河川では4種類しかいなかったんですけど、蛇行河川では10種類もいた。そして、こっちがもっと激しいんですけど、生息個体数、これは何かと言うと、直線河川では961匹見つけたんですけど、蛇行河川では4,900匹を見つけたということで、僕たちは何となく直感で何となく直線河川ではなくて蛇行河川がいいんじゃないかなと言ったことが、時は数字で証明されつつございます。

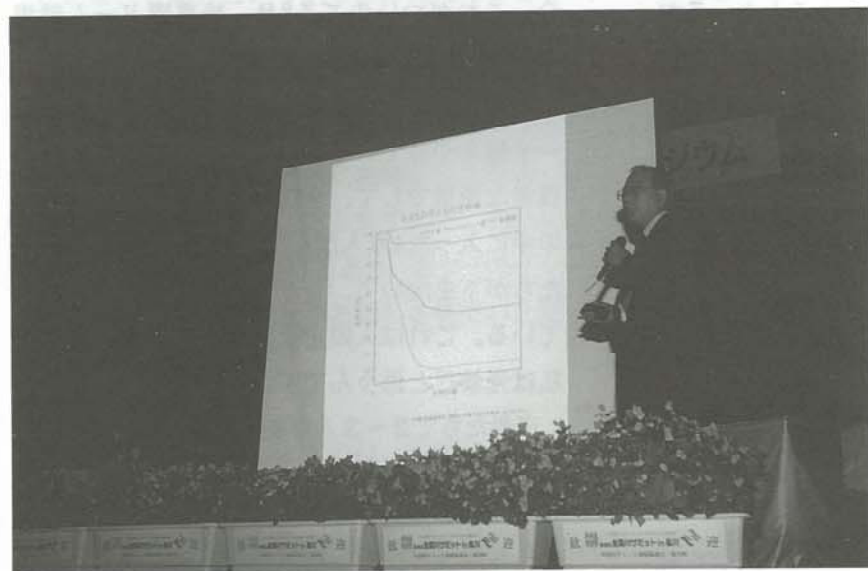
(スライド終わり)

私ども建設省は、最後に行政の話になって恐縮でございますけど、戦後焼け野原の日本から、この日本を守るために、高度の豊かな日本国を、そして災害の少ない日本国をやるために、かなり効率的な河川改修をやってきたなと思っています。効率的な河川改修というのは何かというと、用地をなるべく少なくして、用地の影響範囲をなるべく少なくして、そして与えられた予算で最大の効果を発揮すると。そのためにはどうしても川を直線にドーンとやって、コンクリートをドーンと巻かないと、最小限の予算で最大の効果が発揮できなかったわけですが、これから今私どもは世界第二の経済大国になって、もうキャッチアップの時代、つまりキャッチアップが追いかけて、だれかに追いかけて行くということの50年間ではなくて、世界のフロントランナー、マラソンで言うと先頭に立ちやっ

わけです。

先頭に立った私どもが、今後の50年間の川を整備していくときにはどうしたらいいだろうか、というときには、安全で、安全というのはもう大前提でございますけど、安全でそして子供たちが自然をいわゆる体験できる、豊かな環境空間をつくっていきたいという思いで、思いだけでございますけど、まだまだこれを具体化していくにはまだまだ時間がかかりますが、こういう思いでやってるんだということをご紹介させていただきまして、この川サミットの首長さんたち、こういうことで私どもが、建設省がやってるんだということ、知っていただきまして、また地元に戻っていただきまして、地域の方々と川についてさまざまなことを議論し、これからのことを考えていただきたいと、心からお願いいたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

どうもちょっと長くなりましたけど、お許しください。



〔川の原簿整備事業成果発表〕



肱川町社会教育主事

沖野 晃 己

ただいま紹介していただきました肱川町教育委員会社会教育課の沖野です。よろしくお願ひします。

全国川サミットin肱川の開催を契機に、肱川町では川の原簿を調整しましたので、そのことについて発表いたします。この資料は本日の受付の時に配布しておりますので、後でご覧になってください。

初めに肱川町の概要についてご説明申し上げます。肱川町は愛媛県の西南地域の内陸部に属し、肱川河口の長浜町から34km、県都松山市から60kmに位置しています。東西11.8km、南北11.01km、面積63.35km²で四国山地の主脈に囲まれ、町内の中央を縦貫する肱川沿いに国道が走り、隣接町村を経て松山市、大洲市に結ばれております。

この「川の原簿」なんですが、本年2月町長から川への思いを形に残したいと提案がありまして、総勢38名でプロジェクトを結成しました。プロジェクトは地区割りで7班に分かれ、それぞれが受け持ちの河川について調査・研究を行いました。調査・研究は宿題方式をとりまして、月1回の定例会を行い、全員が集まり、逐次報告し合って意見を交換し合いながら内容の点検を行いました。

初めに昭和58年の1月1日現在で愛媛県が調査しております河川調書について勉強会を行いま

した。河川調書によりますと、本川肱川が1本、本川に流れ込んでいます一次河川が8本、一次河川に流れ込んでいる二次河川が1本の、合計10本が町内を流れている川として登録されていきました。この河川以外にも多くの河川があるので、まず河川名の確認を行いました。

次に河川毎の調査表を作成して、後、図面と写真を貼付し、当町独自の台帳・原簿を作成することにしました。

台帳には①起点、終点の番地、河川延長。②堰、淵、滝、橋梁の場所、名称、大きさ。③利水・治水状況。④川にまつわる民話、民俗、伝統行事。⑤その他特記事項——の5項目について調査を行いました。

現地調査を始めてまず困ったのが、起点の写真撮影でした。地図と地域の方からの話をもとに川を遡って調査しましたが、起点を決めるのに難しい状況でありました。水量の減少と、数年来人が踏み入れてないところですから、1本の河川を調査するのに数日かかったこともありまして。また地図に載っている河川名と、聞き取り調査した河川名との相違があり、聞き取り調査した河川名を優先的に記録していきました。

調査を進めていくうちに、ある班では明治29年から調査した河川調査表が見つかり、大いに役立ちました。

また、本流肱川を含め188本の河川と、32カ

所の滝、20カ所の淵が判明しました。中には自然の摂理により、消滅した河川や、名前の分からなかった河川や、滝、淵もありました。

もっと早く調査をしていれば、分かったかもしれないという残念な気持ちと、今回の調査によって未来へ残せるという希望・安心感を持ちました。

今回は半年間の調査でしたが、ふだんの生活では知り得ることの出来ない先人の思いと、我が町の変化を少しだけ知ることが出来たと思います。この気持ちはプロジェクトのメンバー全員が感じ取っております。

最後に、今回の「川の原簿」の調整についてプロジェクトのメンバーの感想を発表したらと思います。

◇源流を探していて昔の水田の石垣が今は山林となって静かに眠っているのを数多く見たとき、先人の複雑な思いに触れたような気がしました。

◇一本の川を源流から終点まで歩いてみて、普段見ることの出来ない川の表情を見ることが出来ました。また、歴史的な経緯や民話、生活の営みなど違った分野の勉強もすることができて、自分のためにもなったような気がします。



総合司会

肱川町出納係長

池田悦子

◇自分たちが子供のころ、川に親しんでいたときと比べて、水質が大変悪くなっているように感じました。

◇水量の減少や、生活排水による悪化等の原因が考えられますが、今できる環境対策を取り組まないと取り返しのつかないことになってしまうのではないかと、不安を感じました。

◇川の原簿を作成する前は、川についてあまり深く考えたことはありませんでしたが、作成していく過程で、川が人々の生活と深く結びついていたことを学び、今、私たちは川の将来について考える時期に来ているのではないかと思います。

以上で「川の原簿」の発表を終わります。なお、「川の原簿」は風の博物館のほうで展示しておりますので、ご覧になってください。

ご清聴ありがとうございました。

〔基調講演〕



演 題

「川上とこのかわしもや 月の友 芭蕉」

関東学院大学教授

宮村 忠

司会（池田悦子） お待たせいたしました。それではただいまから基調講演を始めさせていただきます。講師は関東学院大学教授・宮村 忠様です。

宮村教授は昭和14年、東京でお生まれになりまして、東京農業大学大学院を終了されました。その後東京大学の河川研究室で河川工学を専攻されまして、現在は関東学院大学工学部教授として、また日本河川開発調査会理事としてご活躍をされていらっしゃいます。

本日の演題は『川上とこのかわしもや 月の友』でございます。
それでは宮村 忠様、よろしくお願い申し上げます。

宮村と申します。少し時間をいただいて、川についての四方山話といたら恐縮ですけども、雑談をしたいと思えます。

演題をつくるように言われましたので、演題を「こんなことでどう」っていうお話をしましたら、「そんなわかりにくい演題はだめだ」って怒られたんですけども、川を見つめるときに、なかなか洒落っ気があって良い句を芭蕉が詠んでくれたなという思いでつけてみました。

川上とこのかわしもや 月の友

というのは、言ってみれば単純に見えていて、流域の良い歌だなという感じがするんですが、これを歌ったところは東京の小名木川というところなんです。

家康が江戸に入府しますと、その前までの戦の中で伝えられてきた、武田信玄と上杉謙信、友という概念で言えば「敵に塩を送る」という

言葉がありました。いかに塩が大事か、戦いの中でも敵に送らなければならない塩、これを大事にしなければならないという教訓から、東京の近くに唯一塩がとれる場所がありました。それが今は千葉県の実徳というところなんです、江戸川という川の下流です。あの川サミットで直轄の川という、そういうことで言うと、江戸川というのが直轄の川なんです、江戸川区というのがその下流ですけど。参加してないよう、抜けちゃってるのかなという感じがしますが、この江戸川の下流が実徳というところです。

この塩を採ったのを、江戸川から江戸の町、隅田川のほとりまで運ぶのに使った川が小名木川という川です。その小名木川の中ほどに五本松という大変風景の良い松が、枝振りの良い松が川を横断するような形で迫り出していました。この五本松という趣のある風景のために、安藤

広重の錦絵ですとか、あるいは長谷川雪旦という方の描いた『江戸名所図会』というようなものにも五本松という舞台として描かれております。

芭蕉がうたったこの歌は、この「五本松のところに船を浮かべて」という前振りがついております。つまり小名木川の五本松という付近で歌った歌です。錦絵や『江戸名所図会』に描かれるくらいですから、大変有名になってる場所です。そこで芭蕉が小名木川を使って、川上と川下は同じ月の友だという、そういう思いを言ったわけですが、実はその前振りのところに、もう少し説明が加わっていて、「深川の外れ小名木川に船を浮かべて」という前振りがありまして、それは市街地から少しはずれたところの知人の家に船で出かけて行って、そしてその小名木川の一番西側のほうに芭蕉が住んでおりました芭蕉庵というのがありました。

ここが大変後に有名になりますが、

古池や蛙飛びこむ水の音

という歌がありますが、この沼があったところです。今そのところが記念碑が建てられていて、元芭蕉が住んでたところということで、多くの方が訪れております。

実はこの芭蕉庵の近くに私の家があるもんですから、ふとこの句を思いついちゃったんですが。最近は大変芭蕉なんか流行ってございまして、芭蕉庵から私の家は2分ぐらいなんです、土日だけではなくて、ウィークデーも含めてたくさんの方が本を持って、案内書を持って見学に来ます。私のところは通称そのへんを下町というもんですから、一種のブームなんですね。たくさんの方が来て、私の町を見て行きます。

これは私が生まれ育って、そして今も住むあいだ、未だかつて観光地の概念を持ったことはありませんので、ちょっと戸惑いを感じます。多くの人たちが私の家の近くを通りながら、指を指すんですね。「あ、あそこに人がいるよ」っていうんですね。下町の人という意味なんですよ。食事をしてるところ、夏など戸を開けていますと、路地まで入って来まして、「食べてる、食べてる」というんです。

深川飯というのが名物なんですがね。ご存じの方がいらしゃるかもしれませんが、深川飯というのが大変今流行ってるんですけど、私どもに言わせると、あんなものは名物になるべき食べ物ではありません。お袋がなんにも食べ物が無かったときに、みそ汁の中へ入れたものをぶっかけてつくっただけの話。ひもじい思いの食べ物。そういうものというのは結構ありますね。吉備団子なんていかに名物そうに言ってますが、あんなものうまいわけじゃないですね。でもそれが名物になってしまうような状況ですから。食べ物ばそれなりにちょっとばかし工夫すればおいしくなるんでしょう。

しかし、町の中を来て、動物園よろしく見られるというのは、あんまり好みではないんですが、何となく時代の変化なのでしょう。そんなようなことが起きてはいますが、その芭蕉が小名木川のそばに住んで活躍をしまして、そこから『おくのほそ道』に出かけました。おくのほそ道に出かけますと、芭蕉は結構川の歌を詠んでるんですが、川の名前を入れて詠んだ歌というのは意外に少ないです。隅田川に住んでるんですから、隅田川という歌ぐらい一つあってもおかしくないんですね。一つもないんです。

小林一茶はやはり隅田川の近く、芭蕉庵の近くにいたんですが、芭蕉庵から歩いて15分ぐらいのところにはいたんですが、これはやたらに隅田川の歌を歌っています。私が数えたわけじゃないんですが、物好きの人が数えまして、約93句あるそうなんですがね。相当なもんです。

この四国で言いますと、正岡子規という方が隅田川のほうにちょっと住んだことがあります。あるいは高浜虚子という、同じように文壇の方が隅田川に住みまして、それぞれ隅田川の歌をたくさん歌いました。結構、子規も虚子も俳句を隅田川でたくさんつくってるんです。

そんな中で近年では、伊藤左千夫という方が『ほとゝぎす』のこれも愛媛県になじみになりますが、『ほとゝぎす』というところに隅田川の連載をしたことがあるんですが、これは歌を書いているんですが、当時のエッセイを書いている

ます。「水害雑感」というのを出しておりまして、明治43年東京に大変大きな水害がありました。東京と言うより明治43年というのは全国至る所に水害が発生しました。約1カ月半ほど雨が降りましたので、大変な激しい洪水が至るところに起きました。

日本の近世、近代を通じて最も水害の多かった年ですが、そのときの隅田川の水害の状況、洪水の状況をかなり詳細に書いておりまして、水害の記録としても実態を知る上でも、実は伊藤左千夫の文章は大変役に立つだろうと思っ

ているんですが、意外に皆さんあんまり取り上げないんですが、そんなような文壇の人たちが隅田川を随分とらえております。

ですから、芭蕉が歌ったからといって不思議ではないんですが、幸か不幸か芭蕉は何にも歌ってない。『おくのほそ道』全部を見ますと、川という名前前で歌ってるのは最上川が一番多いんですね。最上川で歌っております。すでにご存じのように

五月雨をあつめて早し最上川

という歌があります。この歌を歌って全国に大変有名になりましたから、その後、最上川というのは、この歌が代表するように日本の急流の代表的な川になりました。

になりましたというのは変な言い方ですが、最上川に行っていたかとわかるとおり、そんなに急流じゃないんですね。最上川の急流なところは3カ所あります。基点（ごてん）、隼（はやぶさ）、三ヶ瀬（みかのせ）という、この3カ所は大変急流になってます。

最上川という川は、川が柔らかい土地を削って流れまして、その中で途中で花崗岩がところどころに貫入しておりまして、そこだけは削れませんから、花崗岩がちょっと頭を出しよるんですね。そうしますと、これは浅瀬になりますんで、そこが急流の場所です。

最上川ではこの3カ所、基点、隼、三ヶ瀬を何とかして掘削しないと、船には難所として厳しいというので、苦勞した場所です。それ以外は大変ゆったりとした流れです。あまりゆった

りとした流れなもんですから、しばしば少し雨が降りますと、氾濫をする。氾濫をしていいように、氾濫をしても被害が出来るだけ出ないようにということで、桑畑を中心として洪水に強い土地利用というのが全国の中でも最も進んだ、あるいは最もうまく使ってやった川としてよく知られております。

しかし、芭蕉のお陰で急流の川という概念が、それにつられて最上川の舟下りというのがやってきます。舟下りと言えたい急流ですね。天竜下りしづきが上がるよというんで行くわけです。天竜下りでは現実にしづきが上がる場所があります。十津川下りに行ってもありますね。何とか下りというのは、たい急流です。最上川下りというのはいくら行っても、急流なくて、「あれ終わっちゃったの」って、しばしばみんな言います。そのかわり船の中でお酒が飲めます。そのくらい豊かなゆったりとした大河ですね。

この肱川もゆったりとしています。ゆったりとした川、これも一つの見方として大河の風格があると言っていると思います。

芭蕉が歌っちゃったために、イメージが固定しちゃったというのは、結構たくさんありまして、一番厳しいのは

荒海や佐渡によこたふ天の河

というのがありますね。あれでなんとなくみんな荒海やですから、日本海は荒海だということ、日本海の荒波をと、日本海の荒海をというようなことを枕詞でもしばしば使われますが、実は日本海というのは穏やかなんで、荒海は太平洋のものなんです。

芭蕉と同じ世代で日本の中で川を船の交通路として非常に栄えさせるのに貢献した人がおりました。川村瑞賢という方です。先ほどスライドに出しましたが、三重県の出身です。スライドの場所宮川ではありませんが南島町というところですが、今から300年ぐらい前の方です。この方が福島県の阿武隈川、河口は宮城県と福島県両方になっちゃうんですが、ここから江戸までの船の航路を、つまり船が安全に、非常に安

全ということを念頭に置いて、そして物流、物を運ぶのを商売に出来るような、そういう航路の設定をいたしました。

海を通って行きますが、海ですからこのコース通ったっていいじゃないかと思われるかもしれませんが、輸送というのを生業、商売とするような航路、やり方をつくるというのは結構大変なんです。三島東回りという航路を河村瑞賢が制定しまして、その翌年今度は日本海の酒田から下関を経て、そして瀬戸内海に入って大阪へ行って、江戸へ行くという西回りというルートをつくります。

このルート、つまり航路によって、これは先ほども言いましたように航路というのはコースの意味だけじゃありません。立ち寄る港をつくるわけです。その港には船が入ったら必ず安全のためにチェックをしろとか、水を提供しろとか、積荷はほんとに大丈夫かどうか確認しろとか、さまざまなことをやります。

また途中に船のためには、岩礁があるとか、流れが強いとか、さまざまの合図が必要ですので、今で言う灯台を設定します。もちろん今のような灯台ではありません。山の中に松ヤニで明かりをともしたり、合図という方法をさまざまの形でいたします。

そんな航路をつくりまして、海を使って船が大量に安全に定期的に、江戸あるいは大阪に入るようになりますと、日本中でもって船を使った交通が大変な勢いで繁盛しました。その船の繁盛の一番江戸の周りで繁盛したのは、この小名木川なんです。「川上とこのかわしもや 月の友」のこの五本松の周りを流れてる、この小名木川と言いますのは、江戸の中でも一番船が多かった。場所によっては船が交通事故をしばしば起こしたそうです。そのくらい船がたくさん通る。

これは小名木川というのは、ひとつ大きな繁盛した時期、江戸時代の元禄以降というような時期があります。明治になりましたから、栄えは続くんですが、明治に新政府が出来ますと、新しい制度がさまざま出来ました。中でも川に

とって忘れられないのは、郵便法というのができまして、郵便法が出来ましたら、飛脚の人がみんな失職しちゃったんですね。職を失っちゃった。

そこで各地で飛脚の人が集まって、新しい生き方を求めた。これが大体運送会社でした。東京ではこの運送会社を新しくつくった人たちが、そのときに流行（はやり）でした宇和島藩の人たちがつくった、外国に真似してつくったのがきっかけだと言われてますが、蒸気船が出来ちゃった。蒸気船というのは大変多くの人たちを驚かしたようです。

嘉永6年にペルーが江戸湾に入って来ました。浦賀沖に停泊してさならそのうちの2艘は、4艘来たうちの2艘が蒸気船なんです。その蒸気船の部分が制止を振り切って江戸の品川沖までやって来まして、空砲を江戸の町に向かって4発鳴らしたという、その出来事が江戸の市民を大変驚かしたというんですが、実は驚いたのは空砲で驚いたんじゃないで、船がオートマチックに動くというのにびっくりしたそうです。

自由自在に船が動くというのは、このとき始めて見たわけです。今までは風を受けて、あるいは潮の流れに乗って、水の流れによって船が動いてたのが、自分で勝手に動く。先ほどロボットの紹介がありましたが、自分で動くというものを見て、大変みんなびっくりしたそうです。

この地にもゆかりの人と言えば、坂本竜馬という人がいますが、脱藩して肱川のところへ来て、出て行っちゃった人ですね。坂本龍馬が江戸で勝海舟に師事しているころ、この船が来たというんで、江戸から横浜の先まで走って見に行っちゃったそうです。とんでもない人だと思うんですね。面白いと思ったら、走って横浜の先まで行く。横浜というのは東京を出ると新幹線が止まる最初の駅ですから、要するに新幹線が止まる最初の駅を走って行っちゃうんです。

もっともこの時代の人たちというのは行動半径が広がって、私なんかは地下鉄2駅乗るつたら、もういかないという感じですよ。だんだん近年ほど行動範囲が狭くなるんです。かつての人

のほうが行動範囲が広いです。今ほど便利になったんで非常に行動範囲が広がったと思うんですけども、実はそうじゃなくて、逆に狭くなったという、それは川にとっても非常に不幸なことで、川離れを起こしたとか川にみんなが近づかなくなったというのは、いろんな理由を挙げますが、要はめんどくさくなっちゃった。行動半径が狭いですから、ちょっと距離があると行かなくなっちゃうというのかなり大きい要素だろうと思うんです。

坂本龍馬はその時代が少し前だったんで、このペルーがやって来た船を見て横浜の先まで飛んで行っちゃった。それを見てびっくりして、そして帰ってきてみんなに言う。大体びっくりしたら、そのころの人はみんな次々に言ったそうですね、話したそうですね。

新しい生き方をしようという人たちは、新しい情勢に非常に敏感です。「船が自在に動くんだって」という話は飛脚の人たちが新しい運送会社をしようというときに、最も話題になったそうです。順番でいけば馬にしようか、あるいは日本にはあんまり荷馬車、幌馬車というのはありませんでしたが、少なくともその後、ちょっと馬車を使いますから、そんなような時代に入ってもよかったんですが、そうではなくて、「蒸気船というのがあるそうだよ」ということで、すぐに蒸気船を造ります。

その蒸気船をしかも通すために、駅までつくりまします。その駅が両国駅という駅です。国技館があるところなんです。両国という駅があります。これはJRの駅ですが、もともと両国駅というのは船の駅から始まったんです。そして、ここから船を出しました。通運丸という船を出しました。船の先には通運丸を示すように通という字に丸を書いた旗を立てます。丸通と言われたんです。それが今の日本通運の発祥となります。

これが小名木川を通過して、利根川に出て行っただ。小名木川を通過して江戸川に出る、それから利根川に出て行っただ。それから古河ですとか、あるいは銚子ですとか、佐原ですとか、土浦ですとか、そういうところに千葉県、茨城県のと

ころへ蒸気船が定期船として通った。

この船が小名木川を通ります。そうしますと、蒸気の船ですから波が立ちます。これは世界の至るところの船を通すところでは問題になるんですが、波が立ちますとね、岸が崩れるんですが、これで大変みんな困るんです。小名木川でもそのために芭蕉が歌ったときの名所であった五本松という松が、根が洗われるようになり、とうとう明治42年倒れてしまったんで、その後、五本松というのはありません。いまこの句が句碑としてかつての五本松があった付近に建てられています。この蒸気船が通ったところが、小名木川の第二期の繁盛期です。

そのころ、この肱川のところにその時代をそのまま持ってきてみると、長浜が蒸気船で非常に栄えたころに入っていくわけです。とうとう客船が蒸気船で瀬戸内海を走る時代になってきます。阪神方面から大分へ向けるそのルートに長浜が寄港地として出てきます。

その前の元禄のころを見ますと、これもこの肱川に置き換えますと、瀬戸内海が河村瑞賢の大航海時代に幕開けとしまして、大変な交通路として栄えるような時代になるんです。そうしますと、この肱川の河口のところ、なんとしてもにぎやかな交通路となりました。そして、その交通路になったことと同時に、日本中で、あるいはもうちょっと広くその後の時代になるともうちょっと広く世界と言ってもいいんですが、近世の非常に華やかな時代を見ますと、日本の国内でも少し夜遅くまで人々が起きているようになります。

日が暮れたらもう人間の生活終わりという時代ではなくて、みんなが夜に明かりをともして生活をするということになりますと、日本中でろうそくの需要が一気に膨れ上がるというようなこともあって、白蠟の大変もうかる商売が肱川に押し寄せてきました。というより肱川で始まりました。これが大河である肱川を通過して、少し流れのきつい瀬戸内海へ出て、しかし、ほかの海よりもはるかに安全な航路を河村瑞賢という人がつくりましたので、それに乗って阪神・

京のほうに物が運ばれていくというんで、肱川も航海時代に乗って華やかな川の時代を迎えました。そして蒸気船の時代を迎えた。

第二次大戦が始まるころ、小名木川というこの芭蕉の歌った小名木川というところでは、また新しい川を巡る時代がやってきました。それはちょうど小名木川という川を真ん中に区切るような形で新しく川がもう1本掘られました。これは今、荒川放水路と呼ばれているもので、今から水が通ったのが75年前なんですが、隅田川という川の洪水の大部分をまかなうために、新しく川をこういうふうに掘りました。

ちょうどこんな形に2つの川がある、その真ん中を小名木川という川がつなぐわけです。兩岸に幹川の川があって、そこをつなぐ水路であれば、これは便利です。ということで、ここに日本中の最も経済力のある工場群がたくさんできました。東京がこの荒川放水路という放水路ができてから、急激に工場が多くなるんです。つまり臨海工業地帯の走りといってもいいでしょう。

日本の中で工場地帯が東京に初めて登場しました。初めてというのは、その前、明治維新にもありましたが、それはむしろ細々と言ってもいいくらいのもので。まとまって工場地帯というものをつくるのはこのときからなんですが、そこで初めて東京が大阪に経済力で勝つようになります。そこを背景として第二次大戦が始まりますと、小名木川を通じてたくさんの重化学工業で出来たものが運ばれます。

大変華やかな運ばれ方をした、つまり工場が稼働したものですから、この工場の使う水これが莫大に増えてきます。しかし、工場の水は川から取りません、地下水を使いました。そうしましたら、地下水を汲み上げ過ぎちゃいました。地盤沈下が起きました。非常にたくさんの船が通ったんですが、地盤沈下が一気に加速されまして、とうとう地盤沈下のために船が通らなくなった。橋が通れせんから。というような時代まで迎えちゃいました。

同じようなことを肱川に持ってきてみると、第

二次大戦のさなかから、たくさんの軍事用の足場の丸太が中心ですけども、銘木とか大木を取るところでない木材のところ、とりわけたくさん大量に材木を流しました。肱川が一番筏の流れが多かった時代だろうと思います。こういうときに、しばしば水害が起きるんです。

たくさん木材を切りますからね、枝葉がいっぱいあります。そこらじゅうに材木があります。そのときに雨が降りますと、一気に出て来ます。こういうのが橋や川の狭いところに引っかかるんですね。そのために思いもよらぬ、もちろん雨も多いんですけども、思いもよらぬ水害が起きます。昭和18年の肱川水害というのは、多分そういうことが大きな要素であったろうと私は思っておりますが、同じような時代を経ています。

小名木川をさらに続けると、新しい時代になってきました。かつての小名木川の船はすっかり影を潜めました。一つは地盤沈下で通れなくなったこともありますが、新しい交通体系の進出、つまり陸上交通のために船を使うという形態がすっかり忘れ去られてしまいました。肱川にあてますと、同じことが言えるんだらうと思います。そして、そのころからどうなったかといいますと、川への思いは急激に減ってまいります。これも多分同じだろうと思います。

そんなとき、ふと思えば、川上と川下、「おい月の友じゃないか」というのは、結構いける歌ではありませんか。上流と下流、あるいは流域というものは一つでなきゃいけないとか、何かをしなきゃいけない、さまざま言われてます。結構難しいです。難しい議論はともかくとして、月の友、これはとにかくお酒が飲める雰



開気ですね。そんな中で川を思い、というようなことができれば、ちょっとばかしおしやれじゃないですか。

ただ、芭蕉が歌ったので、先ほども言いましたが、ちょっとばかしイメージを先につくっちゃうために、間違っちゃうところがしばしばあります。最上川の急流もそうですし、日本海の荒海もそうですが、芭蕉というのは静と動を一緒にやった歌はわりあいいいですね。どちらかだけというのはしばしば困る。つまり最上川のイメージをつくってしまったのは、動だけを歌ったんですね。そうするとどうもうまくない。

今度は静を言ってみるといって、これは芭蕉のせいではないなんていうと変な駄洒落になりますけどね。続けて言うとおもしろくなるんですが。

小名木川という川で詠んだんですが、実は先ほども申しましたように、小名木川というのは塩を運ぶために使ってた川ですが、東から西に流れる川です。江戸川と隅田川をつなげる川なんですが、もう二三年前ですが、この小名木川の近くで川のシンポジウムがありました。そこに来てパネルをやってられた方が、小名木川に来た。そこでパネルディスカッションの前にちょっと見に行ってみた。

そしたら、「実にけしからん、この小名木川には淵も瀬もない。こういうのは今大変批判されてる。川ではない。」という話をして、小名木川を責めるパネラーの人がいまして、結構2人ぐらいいましたが、いずれも国土庁と建設省の審議会のメンバーです。

大体そんなことは多いんですけど、ちょっとばかし意地悪をしようと思って会場から質問しましたが、「あなたが歩いてきて見たのは、右岸からですか、左岸からですか」って聞いてみたんですがね。そうしましたら、その人は事務局の人に「今日行ったコースは、あその場所、右岸ですか左岸ですか」ったら、今度は困ったのは事務局なんです。実は小名木川というのは江戸川から隅田川に流れる川ですからね、上流がないんです。どっちが上流だか分か

らない。海に沿って平行して走ってるだけですから。

上流、下流がなければ左右岸がないんです。日本では上流から下流に向かって左岸と右岸と言いますね。もっともちょっと前の北海道は逆だったんです。これは北海道の開発の特徴からで、上流に向かって右岸、左岸と言ったものです。今は同じです。

小名木川では、芭蕉は「川上とこのかわしもや」と言ったんですけども、実は上流も下流もないんです。先ほど町長さんが言ってましたが、勾配はという話をしていましたが、肱川の勾配はものすごい緩いんですね。103kmで460何mですからね。大変緩い川です。小名木川はもっと緩いんですよ。0mから0mですから。

こういう人がすぐ気がついてくれればいいですけど、結構なんか事務局の人が怒られてましたね。「ちゃんと教えてください」なん言っていました。答えられるわけないんですが、小名木川には淵も瀬もありません。そんな川でありませぬ。だけど、だからといって淵も瀬を言うのをけしからんと言っているわけじゃないですよ。小名木川にとっては淵も瀬もありませんということ。これは川によって何が無いといかんというのは、全く違ってきます。

ちょっと前に先月ですが、昨年大氾濫を起こしました長江という川の氾濫したところを見て歩いてたんですが、こういう川は行くとどんなと聞かれるんですがね。スケール感も違うし、内容も違うし、なかなか比較できないんです。これは何も外国の川だから、中国の川だからということではなくて、日本の中でもどこかの川でやったからという概念で、ここの川でもいいじゃないというのは、なかなか言いにくい場合があります。長江などは氾濫したよ、その氾濫をしたんですが、被災を受けた人が1億4,000万人ですね。我々の想像の中へ入ってこないでしょう。「1億4,000万の人が被災しているの」って聞きたくなっちゃいますね。

今度、すごいダムを造るんです。ここにもダムの計画ということが、先ほど紹介されてまし

たが、三峡ダムというダムなんです。ダムそのものはびっくりするほどでもありませんが、貯水池の長さ、大きさがすごいんです。長さだけで570km、こういうのはちょっと困るでしょう。これに対してさまざまな意見があります。例えばですね、こんなことやったら環境変わるんじゃないですか。当たり前なんです。変わっちゃうんです。だからそのことについて30年以上もめながらやってきたダムです。

今その人たちが、中国の人たちが一生懸命つくっておりますが、水没する人たち102万人いるんですね。これもすごいですね。大体102万人の人の恨み買っちゃったら大変ですもんね。ですから、かなり大変なことを議論してきたわけです。しかし102万人いて大変だと言いますが、被災者がそれより下流側の被災者が1億人越えちゃったら、それもしようがないんじゃないという感じもしないではないですね。

我々が比較する場所というのはなかなか難しいくてですね。しかし1年に1回、夜、大学で講義をするときに、夜、振り替えの授業をやることある。新学期になりまして、そろそろ慣れたところになりますが、河川工学という授業を持ってらるんですが、そのときに1日だけホテルを見に行くんです。どこでホテルが出てくるのは、こら内緒で言えない。大学が横浜にあるものですから、横浜のどこですごいホテルが出るよなんて言ったら、もうみんな来て、駄目にしちゃいますから、内緒にしています。そこへ行きますと実によく出る。ところがいつ見に行くか、難しいんですね。高々10日ぐらいが勝負ですから。

その中にフランスの女性の人ですが、見に行きたいという人がいましてね、見に行きましたら、見たとたんにもう足がすくんで動けないですね。大きな声は挙げませんでしたが、もう息を呑むようにハッとしたりしたとき、動けない。「ホテル見たら気持ち悪い」と言うんです。「けけ物見たような、悪魔の使いを見たような」というのはその人の意見で、そうなんだろうと思います。

ヨーロッパの人たち、欧米の人たちがじめじめしたところとか、湿地ですとか、あるいは干潟、すごい今ブームですから大事にしてて、昔から大事にしてるように思うでしょうが、ひょっとしたら芭蕉がつくったイメージみたいなものでしてね。だめなんですね、ああいうところは。湿地とか沼とか干潟というのは、忌み嫌う場所。こら欧米の場所です。

我々はそういうところを住むのに最も得意としてやってきましたね。そして現在もやってるわけです。これは日本人と川との関わり方のすごさだろうと思うんです。欧米ではいろんなところをやり尽くして、いろんな価値を発掘し尽くしちゃって、ほかに方法がなくなっちゃったと言っちゃあ失礼なんです。そこで今まで忌み嫌っていたところに思い切って付加価値を付けてみた、というのが近年の湿地ブームと言ってもいいんじゃないかと思えます。ですから、ホテルを見に行かしたらびっくりしちゃうんですね。

でも私どもは当たり前です、もっとも今学生、ホテル見るといことがあまりないんですよ。何しろお米がなってるところを見たことないというのがいっぱいいるんです。ホテルを見に行ったときに、若い人は機転が利きます、最近はどうもすぐ反応が早いです。ですから、一を言ったら五、六、十ぐらいまでパッと考えちゃう人がいます。連想するのは得意です。

ホテルを見に行くと行ったら、好奇心もあることもあって喜んで来ます。その中の1人が手袋はめてるんですよ。なんだいと言ったら、さわるのが嫌なのかなと思ったんです、土やなんかをね。夜歩きますから。そしたらそうじゃなくて、「やけどするから」すごい連想だと思えるんですよ。明るいですから。結構体験しないとなかなか分からないものです。

で、芭蕉の歌に戻りたいと思うんですけども、芭蕉が静かなところを歌ったときに、地名を入れたがらない。分かるような気がするんですね。地名を入れちゃって歌うと、なかなか動と静を一緒にできないんですね。地名入れるときはどっ

ちかなんです。「荒海や」とかですね、「五月雨をあつめて早し」とかですね。

最上川はもう一個ありまして

暑き日を海にいれたり最上川

ですか。つまり最上川河口で歌った歌なんです。酒田のところに日和山というのがありまして、そこで見てたんでしょうね。夕日が下がる時なのか、あるいは、それはよく分かりません、それを暑き日と言ったのか、海に入ると、ドボンと入るような、そんな動的なことを言ったのか、あるいは暑き日というのを、最上川の暑い日、夏ですのですね。最上川というのは、庄内平野というのはものすごい暑いんです。それで有名なんです。ですからその暑い日がちょうど両岸に肱川と同じように、両岸がぐーっと狭くなってきて、砂丘があります。この最上川の場合砂丘ですが、こう来て、そこのことだけずっと開いてるものですから、風が通るんです。風が通るといふのでは最上川は大変有名な川です。川沿いにずうっと風が通ります。そういう面で言うと暑き日が海に入るといふ、そういう情景と言ってもいいんでしょうね。

でもいずれも動く風景を、地名を入れること、川の名前を入れることで表現してるんですが、静かなとこで、どうも言ったら具合が悪いのかもしれない。ここで歌ったように、「川上とこのかわしもや」と言っただけで、この言ってるんですね。小名木川の川下と言っちゃうと、おいどっちだということになるんです。だって上流も下流もないんですから。そこが彼のうまさなんでしょうが、ただ川の中で上流と下流同じ思いで月を見る、つまり月の友。そんな感じが川の中で、かつては猛烈にあったわけなんです。それが今、普通に言う流域圏という、流域が一つとなって社会圏、文化圏、経済圏をつくってきたよと、そういうことを言ってるんだろうと思います。

今、それが崩れちゃったんですが、崩れたんですけれども、川への思いとか、川への心をふつと考えるときに、やっぱり上流と下流同じ月を見て酒飲んだほうが良さそうだなという、そんな

な思いに駆られることが、皆さんもしばしばあるだろうと思います。それをひょっとしたら300年ほど前に芭蕉が思いを込めて、この句を詠んだと勝手に解釈してもいいのかなというような思いがいたします。

この句の話はずっと言ったときに、地元の方から、こんないかげんな句じゃなくて、もっと流域の中で上流の町はどうするべきか、というようにちゃんと話しなさいというお叱りを受けたんですけどね。結構難しいんでね。何をしたらいいかって、分からないですね。これがいいというものはないはずなんです。みんながこれがいいって、やったら多分駄目なんだと思います。

ただ、今日、河口から順番に上がって来ました。で少し実感しようと思って上がって来ました。で面白いですね、ここの川もどっちが川上なのか、川下なのか分からなくなっちゃうときがあるんです。河口出たときに向こうへ向かってたのが、水源へ行ったらまた向こうへ向かってる。河口と水源が同じ方向に流れていて、珍しいですね。中国の黄河が一旦北へ行ってからまた南へ変わるというのと、ちょっと似てるのかもしれない。

そして、水源から少し下がってダムがあるところへ行きますと、野村町というところで、そこでひょっと思い出しました、看板に出てましてね、相撲やるとね、もうすぐ来るんじゃないですか、九州場所終わるとここへ来て、プロとアマがやるんですね。私の記憶だと、舞の海が入ってここで相撲やったときに、舞の海がスポーツ新聞かなんかに、あそこへ言ったらプロとアマと一緒に相撲取るわけでしょう。「アマの地元の人が俺が小さいと思うて、笑顔で取りに来やがった」というおこりをなんか書いてるのを見ましたが、彼、小っちゃいですからね、舞の海で、入門するとき背が足りなくて、金槌で頭たたいて身長を獲得したという、そういう相撲取りですがね、そんな話があったのをふつと思い出したんですが、ここはプロとアマが相撲を取るところ。九州場所が終わった後、寄る

んですね。

たしか、玉春日という関取が出てるところですね。いろんないわくがあるんでしょうが、彼が肱川という名前だったら、どうだったのかなと、そんな思いをします。昔、大乃国と北勝海というのが北海道の十勝川の十勝郡というところから出ました。そのときに地元の人たちが何とかして地元の名前を入れてくれ、「十勝川」という名前にしてくれと、陳情したんですね。

そうしたら、姓名判断をやる部屋の人が「十勝どまりだからだめだ」あれ付けてたら、十勝川もっと有名になったし、それからあの2人もあんなに苦労しないですんだんじゃないかと。

みんなで「肱川」という関取をつくりませんか。自治体の方が、だって川の名前を付けてる自治体が集まったんでしょう。皆さん後援会長になれるでしょう。ぜひ関取に川の名前をつけてください。そうしたら多分化粧回し建設省がつくってくれますよ。

時間が参りましたので失礼します。



〔パネルディスカッション〕

テーマ

「美しい川を次代に引き継ぐために」



<コーディネーター>

愛媛大学教授 鈴木 幸一

<パネラー>

建設省四国地方建設局河川部長

佐藤 直良

愛媛県土木部長

山本 雅史

三重県宮川村長

尾上 武義

南海放送アナウンサー

永江 孝子

(社)大洲青年会議所前副理事長

坂本 芳則

愛媛県肱川町長

大野 和

司会（池田悦子） 大変長らくお待たせいたしました。

これより第8回全国川サミットin肱川・パネルディスカッションを始めさせていただきます。今回のパネルディスカッションのテーマは「美しい川を次代に引き継ぐために」でございます。この美しい川の流れを、いつまでも残しながら、次の世代21世紀に向けまして、川とどのように接していけばいいのかという、新たな方向性を見つけるために、立場を越えて、地域を越えて協議を進めていただきたいと思います。

それではパネルディスカッションに参加をさせていただきます皆様をご紹介します。

まず初めに、コーディネーターを務めていただきます、愛媛大学工学部・鈴木幸一教授でございます。

続いてパネラーの皆様をご紹介します。

愛媛県土木部長・山本雅史様。

建設省四国地方建設局河川部長・佐藤直良様。

南海放送アナウンサー・永江孝子様。

社団法人大洲青年会議所前副理事長・坂本芳則様。

次年度第9回川サミットの開会地であります三重県宮川村村長・尾上武義様。

そして地元肱川町の大野 和町長。

以上6名の方々にパネラーを務めていただきます。

それでは鈴木教授、よろしくお願い申し上げます。



鈴木幸一（コーディネーター・愛媛大学教授）

ご紹介いただきました愛媛大学鈴木でございます。河川工学を専門としておりまして、こういう場に引き出されたと思っております。

本日のパネルディスカッションのコーディネーターをさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。じゃあ座って進めさせていただきます。

先ほど司会の方からございましたように、これから約1時間半でございますけれども

「美しい川を次代に引き継ぐために」

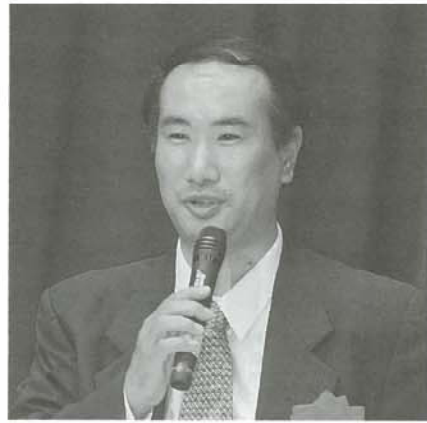
と、そこに書いてございますけれども、これをテーマにいたしまして、パネラーの皆様のご意見を伺い、そして議論していただくと、こういうことになってございます。

1時間半ですから、非常にいろんな意見が出て、十分な議論ができないかと思っておりますけれども、出来ればこのパネルディスカッションで何か得るところがあれば、こういうことを期待しております。

パネラーの皆様には大変お忙しい中をお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。本討論会の進め方でございますけれども、まず各パネリストの方にそれぞれの立場から順番に、肱川、あるいは美しい川とか、あるいは次代に引き継ぐなどの思いを述べていただきたいと思います。こういうふうに思います。

それが終わりましたら、それらのお話の中から美しい川を次代に引き継ぐためには、今、我々がどんなことをしたらいいのかという議論をしていただきます。最後に出来ればその総括をしたいということにさせていただきます。

それでは早速ですが、まず建設省四国地方建設局の河川部長、四国の河川事業を統轄されております河川部長の佐藤様から、まず肱川、あるいは美しい川、あるいは次代に引き継ぐ、こういう思いについてまずお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。



佐藤直良（四国地方建設局河川部長）

ご紹介いただきました四国地建の河川部長をしております佐藤でございます。「美しい川を次代に引き継ぐために」と、外面的な美しさではなくて、私はどちらかというと美しさの前提となる足腰の強さ、健康な川、あえて言うと安全のことだけをちょっと申し上げさせていただきたいと思っております。

今年、今までいろんな水害が起こっております。10年か20年すると、今年はやっぱり大変な年だったろうと、我が国の災害史上やはり転換期になった年であろうという、後世そういう評価がなされると思っております。

3つ大きな出来事がございました。

1つは、先般ありました熊本県の不知火町。最近私ども高潮の恐ろしさというのを忘れておりました。これは正直な話でございます。雨が降って洪水が起こるけど、なかなか高潮の被害というものが、ここ何十年となかったと、顕著な被害がなかったと。これが1点でございます。

2点目、昭和57年長崎の大水害の時も、警鐘は鳴らされたんですが、今年、福岡と東京で地下室、建物の地下でお二人が水死された。川とは全く関係ないところで亡くなられたと。これが2つ目でございます。

3つ目、これは夏、全国的に放送されましたが、神奈川県相模川の上流玄倉川と。この事件で私も名前を知ったような川ですが、ここでキャンプに来ておられた方が、増水した川の中で流されてしまったと、こういう痛ましい事件。

いずれも私どもが忘れてたり、あるいは想像だにできなかった、あるいは分かっていたんですが、そこまでの配慮が十分社会的になされてなかったと。そういう意味でこの3つの事故は、今年私自身記憶に残る事故だったんじゃないかならうかと。

今年の水害を振り返ってみますと、この四国地方もそうなんですが、各地でいろいろな災害が出ております。今年の台風の特徴は、従来ですとかなり北半球の緯度の低いところで台風が発生したのが、かなり緯度が高いところで台風が発生したと。発生から日本襲来まで時間が余りなかったと。しかも次々に発生したということで、相当の長雨、気象台が発表する数字を足し合わせると、高知県では5,000mmを超えたのではないかと。そのくらいの雨、実際2,000数百mmもうすでに降っていると思っております。そういう雨が来ております。

先ほどの3つの災害、あるいは今年の水害を通じて、やはり肝に銘じて思ったのは、やはり昔の知恵、堤防を築いたり、あるいはポンプをつくと、こういう仕事も私どもの役割として、これは治水ということですが、大事なんですが、やはり被害に遭わないと、こういう備えがやはり改めて重要視されたんじゃないかならうかと。

いくら施設をつくったとしても、自然の脅威、これは際限がない。我々が立ち向かうにしても、やはり我々が幾ら頑張っても無力だと。そうなるとやはり一人一人の備え、これがやはり心構えも含め、あるいはお一人お一人の力を合わせて水に立ち向かうと。これは水防という我が国固有、あえて申し上げますと固有に近い災害文化だと思います。こういう水防だとかあるいは一人一人の備えと、それを促すための社会的基盤、それがやはり相当必要じゃなかならうかと。

当肱川でも、やはり平成7年大きな災害が出

ております。肱川の特長はもう肱川の町長さんからもお話いただきましたが、かなり難しい川だろうというふうに考えております。その中で堤防を築き、あるいは上流側のダムを整備してきたと、こういう実績がございますが、やはり一人一人の備えを、あるいは行政体同士の備えを十分しっかりするというので、今後具体的には、例えば四国四県の中で、町長さんもいらっしゃいますけど、肱川の下流の長浜町をまず防災先進河川というふうに位置づけて、例えば、将来的には各ご家庭まで、川の情報、あるいは台風の情報、あるいは行政からの情報、それが迅速に流れると。そして各家庭でご判断いただくだとか、こういうようなところへ持って行きたいと思っております。以上でございます。

鈴木

はい、ありがとうございます。

まず、河川を次代に引き継ぐためには、安全な河川でなくてはならないなという、治水が非常に重要だという立場からお話いただき、ありがとうございます。

それでは引き続きまして愛媛県土木部長の山本さんのほうからお願いいたします。愛媛県の土木部長さんは、愛媛県の河川行政全般を担われてございますので、そういう立場から一言お願いしたいと思います。



山本雅史（愛媛県土木部長）

愛媛県の話に入る前にちょっとだけですが、私、かつて十数年前になりますけど、外務省に出向しましてサウジアラビアというところで3年間ほど大使館勤務をしたことがございます。

そこはご承知と申しますけど、砂漠の国と申していいような地域なんでして、雨がほとんど降らないんですね。特に3年間のうち、はじめの1年は興味を持っていろいろ数えておったんですが、1年間にこちらで言う夕立程度の雨が、年に3回ほどありました。後はもうポツポツと雨の跡が残るような、「あ、降ってるのかな」と思ったらもうやんでいる、というようなのが数回ございました。

当然の事ながら川というのはないんです。それからここで見渡しますと、体育館の周辺も非常に緑が青々としているわけですが、こういった草もほとんど生えてない。もうほんと小さい灌木が幾つか生えとるという程度。

そういう世界をちょっと想像してみたいんですけども、そういう世界を想像すると、いかにやはり日本というのが自然に恵まれているかということが、私、痛切に感じたわけでございます。

もう一つは、川以上に雨ということでございますけれども、やはり雨が降る、あるいは雨上がりのすがすがしさ、そういったものが全くなくて、1年365日のうち1年362日が晴の日だとすれば、自分の気持ちをコントロールするだけでも大変なわけでございます。

日本で言いますと、きょうは雨が降るから読書でもしようかとか、あるいは音楽でも聴こうとかいような気持ちになります。また秋は、からっと晴れたな、夕方帰りにビールでも飲みに行こうかと、そういう気持ちになるわけでございます。これがもう1年中晴だとすると、自分の気持ちというのをコントロールするのはものすごい大変でございます。

そういった中で、いかに日本というのが四季に恵まれているということがありがたいことかな、ということを実感したわけでございます。なかなか想像するのは難しいかとも思いますが、ぜひ皆様方、全国から集まられておりますけども、ご自分のふるさとで周りを見渡しても、岩山ばかりだと、川もないというようなことを想像してみたいと思います。い

かにありがたいか、雨のありがたさ、あるいはそれに育む川のありがたさというものが、再認識されるのではないかというふうに思います。

愛媛県の川でございますけども、大きく分けて2つの姿があるかと思えます。1つはやはり愛媛県も四国のどちらかというところのほうなんですけど、ずっと今この肱川流域も含めまして南の方に下がっておるものから、南のほうの川というのは、この肱川をはじめとして非常に雨が多いと。いきおい災害が起こると。それから瀬戸内側のほうにつきましては、今度は雨が日に少ないということで、川も涸れております。

一級河川で大きな川が、この肱川と、重信川という松山市を流れる川があるわけでございますけども、重信川のほうには、下流のほうはほとんど水が流れておりません。いきおい洪水被害そういったものが多くなるということでございまして、昭和53年、あるいは平成6年、大洪水を受けたわけでございます。そういった2つの姿があるかと思えます。

川への県民の方々の関心というのは、総じて高いというふうには私は認識しております。河川のいろんな整備も従来、昔はコンクリート護岸でずっとやってきておったわけでございますけども、一番初め昭和50年代の初めごろ、その護岸を単なるブロックからもう少し見栄えのいいものにしようじゃないかというような動きが始まったわけでございますが、今申しました重信川の支川の石手川、こういったところではいち早くそういったものが取り入れられて、全国の見本になったと。

それからまた最近とみに注目されおります多自然型の川づくりといったようなものも、この肱川流域、小田川という非常に大きな支流があるんですけど、あそこの方々を中心として非常にこの流域の方は勉強されまして、そういったことで非常に立派なものが出ておると、これも全国に先駆的な役割を果たしておる。

またソフト的な活動でも、県の東のほうで土居町という町がありまして、関川という川が流

れておるんですけど、ラブリバーの会をつくられて、非常に長くこれも皆さん方250人ぐらいの会員の方がおられるんですけど、年会費を集めているいろんな川の清掃活動等に努められておる。そういった皆さんの動きがなされておるわけでございます。

この肱川につきましては、先ほど来、町長さんをはじめた皆さんの方からご紹介がございましたけども、資料をちょっとお借りしますと、『肱川流域の風物詩』というパンフレットを開いていただきますと、肱川の流域というのが出ておるわけでございます。非常に特色のある川でございます。特に後で見ていただきたいんですけど、ちょうど図面の左下のほうになりますけど、流域の上流部と海の間なんと近いことかということでございます。あそこで予讃本線に乗っておりますと、海が見えたと思ったら川の上流、それも肱川の上流、ちょっと信じられないような気持ちになるんですけど、こういったふうにはずうと上流まで回り込んでおる。

こういった川でございます。この流域自体が県下の面積の2割強を占めておるわけでございます。非常に山の中を流れておる川ですから、県全体の平均で見ますと約30%が平地なわけでございますけども、この肱川につきましては、平地は約10%しかないというところでございます。

そういった中で第一次産業をはじめとして、いろんな産業が育まれておるほかに、さらに水の少ない地域に対しまして、ここの野村ダムというのがございますけども、これ昭和56年につくられたダムでございますけども、この流域外に向けて佐田岬のほうだとか、あるいは南の宇和島のほうだとか、そちらのほうへも広く水を分けて、周辺も非常に潤っておるということでございます。流域にはこの野村ダムのほかに、鹿野川ダムという、この(会場)下の川から上流へ行ったところがございますけれども、治水と発電を目的としたダムがあるわけでございます。

さらに、今第3番目のダムとして山鳥坂ダム、これは下流の治水の目的のほか、先ほど申しま

したように非常に松山市域を中心とする中予地域と申しますけれども、非常に水が少ないものから、逼迫するものから、こちらのほうにも水を分けていただきたいということで、今こういった事業が進められておるところでございます。

以上簡単でございますが、ご説明申し上げます。

鈴木

はい、ありがとうございます。

山本さんからは、愛媛県の水資源が偏在していると、瀬戸内側は非常に水がなくて、南側は非常に水が多いということで、特に肱川の水は発電とか、あるいは周辺にもかなり利用されてるというふうな、利水という立場からお話いただきまして、どうもありがとうございます。

それでは次に南海放送のアナウンサーの永江さんからお願いしたいと思っておりますけども、永江さんは、皆さんご承知のように南海放送の『もぎたてテレビ70』ということで、日曜日のお昼はおなじみだと思えます。母親の立場と言いますか、主婦の立場から一言お願いします。



永江孝子(南海放送アナウンサー)

そうなんです。パネリストの中で唯一川辺育ちでもなく、かといって川の専門家でもなく、何であんたここにおけるのという立場なんですけれども、全国的にはそういう人間が一番多いんじゃないかと思うんですよ。川についてはよく知らないけれども、川に対する思いはあって、期待するところもあって、そういう母親の1人として、ちょっとお話をさせていただきたいと

思うんですけど。

仕事柄、ただいろんなところを歩いております。今担当している番組が地元密着の番組で、ふるさとの良いところ探しをしようということで、もう足かけ9年ぐらい、愛媛県下70市町村をずうと歩いて回りました。でいろんな市町村へ行くんですけども、何となく川のあるところのひと、そうでないひと、肌合いが違うというか、最初に声を掛けたときの雰囲気が違うんですよ。

これをご当地肱川町に、イギリス生まれの方なんですけども、ギャビン・バントック先生という方がいらっしゃいまして、30年近く前にイギリスから日本にいられて、御四国さんまいるの途中、肱川町に立ち寄って、とっても気に入ってしましまして、家を構えてもう肱川に今永住していらしゃるんですけども、ギャビン・バントック先生はオープンマインドって言われてましたけど、あ、そういうところあるなあって、私も感じております。

何となく開けてるといえるか、ウェルカム体制というのがあるんですね。閉鎖的じゃないんです。これはやっぱり先ほどから宮村先生のお話でも、川が道だったというか、川上と川下をつながってるいろんな人の往来とか、物資の輸送とか、川が道でしたからそういうことで閉鎖的では生きていけないという、そういう気質が育ったのかなあって思うところもありますし、実際、水の流れてほっとしますよね。ですから、今地下街ですとか、ビルの中とかはわざわざ水引いてきて、川、模擬川と言うんでしょうか、川の流れをつくってるんですよ。ですから、なんかふるさとの景色の中に川の流れる風景を持つてる人が幸せだなあって思います。潤いがありますね。

一母親としては、川の無いところに生まれた子はしょうがない、けれども川はやっぱりその地域の宝物であり、言ってみれば日本の宝物だから、恵みは少し分けていただきたいと思ってますし、親の世代の1人として、使命というか思いを持っております。川を通して子供たちにな

んか自然の大切さを教えたいと言いましょか、地球に触れさせたいということなんですね。

川に行くと流れがあって、「あ、きれいだな」と見ると、魚が泳いでます、小さな魚が。「あ、川にはいろんな生物がいるんだ」難しい言葉で言いますと、生態系と言うんでしょうか。いろんなものがいろいろ集まって、はじめて仲良くやってるんだみたいなことを、小っちゃいころから何遍も川に連れていくことで、覚えさせられるんじゃないかということと、長く川におりましたら、釣りもするでしょう、魚もすくうでしょう。捕った魚はやっぱり河原で焼いて食べますよね。

これ一つ食物連鎖を何となく経験できる場じゃないかななんて思っていて、魚が大きくなるためには、食べられるぐらいになるためには、ほかの川の流れの何かを食べないといけなし、食べられるという危険を冒しながら、なおやっぱり生きてきたんだよって。それを食べることができるんだよ。あるいは魚せっかく大きくなって、鳥に食われたり、そういう食ったり食われたりの関係が、地球上にはあって、それで成り立っているんだよ、みたいなことをちらっと話せる場が川のキャンプだったりするのかな、なんて思ってます。

それを何か壊しますと、食物連鎖のバランス、生態系のバランスを、はずみで壊してしまますと、全てが壊れてしまう。それを壊すと自分自身の生存も危うくなるんだよ。水を汚すと川が汚れてしまうと、魚が住めなくなる、そうすると自分も生きてはいけなくなるんだよという、1回では無理だと思います、こういうことは、1回では無理ですけども、毎年連れていくとか、そういうことで何となく教えられるんじゃないかと思ってます。

感じさせると言いましょか。そういう開発と保全のバランスというんでしょうか、難しい言葉で言いますと。これを今からの子供には小さいときから養わせないと、地球が本当に危ないんじゃないかと思ってます。

なんか話がちょっと大きくなってしまいまし

たけれども、先ほど河川局長さんの頭のほうで、最初のオープニングのところでお話もありましたように、ほんとに手を水の流れに浸すとか、そういうこともしてないんですね、そういう意味で親の世代として、子供に伝えたい川という、川に対する思いがございます。

鈴木

どうもありがとうございました。

お子さんを持たれている母親の立場から、子供に自然と接触する場として、川に非常に深い思いがあるというお話でございました。どうもありがとうございました。

それでは引き続きまして、青年会議所の坂本さんをお願いしたいと思います。坂本さんは大洲青年会議所では流域サミットとか、そういういろいろなイベントで非常に流域の川に対する思いというものを、非常に表現していこうという運動をされておられます。坂本さん、どうぞよろしく願いいたします。



坂本芳則（大洲青年会議所）

はい、今ご紹介にあずかりました坂本です。

皆様こんにちは、大洲青年会議所の坂本です。本日は全国川サミットということでお招きありがとうございます。肱川町より下流に住む住民の1人として、また大洲青年会議所の川に対する考え、取り組み方を少しお話しさせていただけたらと思っております。

僕の住む町は下流にありまして、菅田というところなんですけど、皆様ご存じだと思うんですけども、小さいときから肱川に親しんでまいりました。朝早くからウナギを捕る道具、ジ

ンドウというんですか、地獄と書いて皆さんそれぞれ表現は違うと思うんですけども、それを夕方仕掛けていて、朝上げに行くわけです。寒い川の中で腰まで浸かっては上げていった、そしてウナギを捕った覚えがあります。

そして、午後からは毛針を持ってハヤを捕りに行くわけです。このハヤがウナギのエサになるわけです。そういった思い出があります。そして、朝から晩まで、夕方まで川で過ごした思い出がたくさん僕にはあります。

そして、私の住む地区なんですけども、よく洪水に見舞われました。菅田というところは稲作が盛んなんですけれども、川が氾濫するとすぐ水に浸かるわけなんです。父母が水田で汗水垂らして作った稲を、僕も少しは手伝ったんですけども、秋の収穫前に全て枯らしてしまうわけですよ。そういった思い出もあります。

しかし、そんな洪水の中でも楽しみがありました。浸水した水田に本流からコイやフナがたくさん入って来ます。父と網を持って朝早くからそのコイやフナを捕りに行った覚えがあります。皆様が水害で苦しいときに僕たちは網を持って楽しんでいたら、なんと不謹慎なと思うんですけども。ちょっと洪水を逆手に取った楽しみ方ではないかなと、自分では思っておりますが。

私たち青年会議所の諸先輩方は、そういった肱川に慣れ親しんだ思いをたくさん持っています。流域の方々、また肱川を知らない方々にそういった肱川の思いを何とかして伝えていこうではないかということで、16年前ですかね、大洲青年会議所が筏流し大会というものを始めました。筏流し大会の出発点は今で言う板野橋ですかね、それから最初は大洲城の前を緑公園と言うんですか、緑地公園まで行ってたんですけども。これが河川が県とか建設省とかどっかわからんということで、県の川だけ使うてくれなんか言われて、県の川だけでやることで肱川橋で収まったというような裏話もあるんですけども。それは少しおいといていただけたらと思います。

そして、だんだんイベントが大きくなるにつれて、警備、それとか準備が膨れ上がっていったわけです。肱川を使用するために許可を取ったりとか、警察をお願いをしたりとか、皆さんをお願いをしたりとかいうことで、イベントがだんだんだんだんだんだ膨れ上がってきたわけです。

ある小学校に行きまして、出艇依頼をしたときのことなんですけども、「子供が怪我をされるので、それは困ります」とか言われて、そんな苦い思いをして僕らも筏流しを一生懸命やってきたわけです。

なぜ自分の身は自分で守れないのだろうか。どうして川を使うのに許可がいるのだろうか。みんなの川なのに、とかいう思いがだんだんだんだんつものってくるようなときがありました。ひとつこれも時代の流れではないかなと思っっているわけなんですけども。

そうしているうちに出艇数がだんだん少なくなっていくわけです。この筏流しに出て来る方々が、それが激減していくわけです。本当の思いは筏流しを開催して、肱川をどうやって知っていただくか、肱川というものはどういったものなのか、川はどういうふうに住民と密着していきけるのかという思いが本当の思いだったんですけども、イベント化することによって経費もかかり膨大化していく、出艇数が足りないからイベントは開催できないという思いの中で、どうしてというか本当の肱川、龍の化身のような肱川ですよ。肱川、ときには静かに、洪水で荒れ狂って怒りまくるといような肱川、そういった思いをもう一度見つめ直すと思って、14回続いた肱川筏流しも一時中止しました。

で青年会議所で肱川流域サミットというものをやってみようということで、肱川をもう一度考えてみようということで、僕たちは行動に移したんです。それに当たりまして建設省の方々には大変お世話になりまして、肱川流域サミットが開催するに当たりまして、まず最初に自分たちが肱川を見て回ろうと思いました。

源流すら知らない人たちがたくさんいるんです。かく言う私もほんとは源流を知らなかった

んです。宇和町の正信というところに源流があるということを初めて知ったというのは、僕もちょっとショックを受けたんですけども。本当はもっと河川の奥じゃないだろうかとか、城川の奥じゃないじゃろうかというような、自分ではイメージがあったんですけどもね。それで支流がたくさんあるというのも自分たちで知ったというのが現実なんです。

そして、第1回のサミットを開催するに当たって、徳島大学の端野先生に来ていただき、『森林と水の関係について』ということをお話いただきました。そのときには、森林は蒸散と発散作用がどういふふうに行われていく、森林の保水能力がどうなのか、森林のダムの問題とか。今肱川町では人工的なダムの問題についてたくさん議論されていますけれども、端野先生は森林のダム、もともとは木というか広葉樹の保水力によって森林のダムがあるんだということを、僕たちに教えていただきました。大変勉強になったと思います。

肱川流域全体で考えなければいけないということ、端野先生に教わったというのが、僕たちの件です。そして、今度肱川流域サミット開催に流域の方々に参加していただく、流域が1市11町、僕らの場合は9町だったんですけど、肱川町の長野町長様に聞きますと11町あると。肱川流域全体で1市11町2村と、そういった方々に参加していただくのに大変苦労しました。僕らは民間の団体、ボランティア団体なので、もうお願いして行政の方々に「何するん、おまえそんなことして」とか言われるのがもう関の山でしたね。

それでも民間の方々の主婦の方々とか、小さなボランティア団体でものすごく熱心な方々を発見することができたというのが、大洲青年会議所の一番の財産ではないかなと思います。

流域の方々にはそれぞれ違った川に対する思いとか、文化とか、文化というのはおこがましいと思うんですけど、川に対する思い、それは上流は上流なりの思いがあります。中流は中流なりの思いがあります。下流の長浜地域には長浜

地域なりの思いがあります。そういったことで、いろいろな私は勉強させていただいたように思います。

そして、第2回目なんです、愛媛大学の横山先生をお呼びいたしまして、肱川連邦共和国をつくったらどうかというお話をさせていただきました。肱川流域の文化の違いについて話をさせていただき、私たち青年会議所はそういったことから肱川全体のネットワークづくりということを考えております。肱川という川を媒体として、流域に住む人々の交流ができればと思っております。そして、行政も企業も民間も交流ができればいいように思っております。

そういったことを、イギリスとかそういうところではグラウンドワークトラストと言うんですけども、行政と企業と民間が参加トラストの中でパートナーとして融合し合って生きていく、企業もボランティアをし、民間もボランティアをし、行政のほうもボランティアを参加していくというような形で、自然を守っていく。

そのグラウンドワークの発祥というか、その一番最初の考え方というのは、自分の家の前、周りをまず最初にきれいにしていこう、整備していこう、その前の道路を最初きれいにしていこうということから、みんなで地球グラウンドワーク地盤を働きかけるというような形で、グラウンドワークというものをなつたように思います。

そして、ボランティアを通していくことで、流域全体が肱川を媒体としまして、流域のことを考えていく、そうしたことがやっぱり次世代につなげる肱川というんですか、私たち青年会議所は「せいりゅう」肱川というように、呼んでいます。「せいりゅう」というのは清らかな流れではなくて、「聖」と「龍」、肱川というのもともと川というものは皆様ご存じのとおり、上流から下流にかけて、臥龍とか蛇淵とか、蛇とか龍に対する思いがかなり川にあると思います。

そういったことで「聖龍肱川」ということで私たちは銘打った肱川を媒体としてそういうふ

うなネットワークづくりに励んでいます。何も難しく考える必要はないと思うんです。小さなことからやっていければなと思っております。私たち青年会議所はそう考えております。

今回全国川サミットを開催するに当たって、肱川町のスタッフの方々が大変ご苦労様でしたと思います。サミットの開催で多分僕らと同じような思いがあると思います。いろんな思いを皆さんで話されたと思います。川についてとか、主旨とか、そういうものについてたくさん話されたと思います。また全然知らないことや新しい発掘が、たくさんあつと思います、開催をするに当たって。

一番大事なことは、僕はサミットを開催するまでの思いとか、苦労とか、そういう改めて肱川を見つめ合うことが大切ではないだろうかと思っております。

この全国川サミットを機会にこれからも肱川町で小さな手作りの川サミットというんですかね、そういうのを開催してはいいかでしょうか。皆様にやはりこのサミットの会場に来ていただけない方々もおられると思うんです。そういった方々に真剣に議論していただく場所、そういうものを与えてあげるといふのも、これから良い肱川、良い肱川づくというのが出来るのではないかと思います。

本日は皆様、私の話を聞いていただき、まことにありがとうございます。

鈴木

はい、どうもありがとうございました。

地元で育って、肱川へ非常に熱い思いを持っている、子供のころの思い出とか、肱川への熱い思いがイベントという、筏流しとか、肱川流域サミット、あるいはグラウンドワーク、そういうふうなものの活動に発展していくということのお話を、どうもありがとうございました。

じゃあ、時間の関係で引き続き肱川町長の長野様にお話ししたいと思います。どうぞよろしくお話ししたいと思います。



大野 和 (肱川町長)

川が駄目になりよるのではないかという思いは、皆さんお持ちではなからうかと思うわけですが、我々もまたそのことを非常に思っておるわけでございます。

今回のサミットを記念しまして、私のほうに水峠という峠がございます。それでそこへ記念碑を建てました。風峠というのもありましたので、これも先年碑を建てたわけですが、水峠の碑を建てまして、除幕を二三日前にやりまして、非常にみんなサミットの準備で忙しくしてしますので、私と一二の者が行って済ましたというふうなことでございますが、そのときに水峠から昔は水がどんどん流れよつたんだという話があったわけでございます。

「そうですか、今は流れてないがどうしてですか。どうして水が流れんようになったと思いますか。」というその地主さんに聞きますと、「いや難しいことは分からんのじゃが」言いよいでましたが、道路ではないか、道路で分水嶺の水が集まるのが、道路を流れておるかもしれないし、山の尾根のところを切って道路がついてますから、地下水の流れも変わったかもしれない。というふうなことでございました。

非常にいろんな条件、気象の条件も大変変化をしまいでまして、変動幅が非常に大きいわけでございますが、今までお話がありました中国の川の話にしましても、非常に気象状況というのは変動が激しい状況になってきております。

そしてまた、山も変動してきておりまして、国連の統計でいけば、大きな観点から見ますと、1,600何十万haの山が毎年なくなっている。というふうな状況もあるわけでございます。

農林業が変わってまいりました。我々の生活が変わってまいりました。いろんなことが川や水にも影響があるのではなからうかというふうに思います。ですから、一つのことだけを原因と断定することはできないんじゃないかというふうに思いますが、いずれにしても川や水を考える場合に、水量というものが減ってきているというふうなことが一つ言えようかと思えます。

それから私のほうの町はこういうふうな山と谷の町でございます。大体、標高200mぐらいラインに小さい平地がありまして、そこへ10戸、15戸の方が生活をいたしておられるわけでございます。その台地で生産をし、生活をしておられるわけですが、その集落の飲料水を台地のこじりと言いますか、50mぐらい下へ下がったところへ湧き水が出ておるので、その水を取ってポンプアップして飲料水を供給しておったわけでございます。

そうしますと、先年、飲料不適ということになったわけですね。長らく飲んでおりましたのに、飲料不適というふうな検査結果が出ましたので、それは大変だということになったわけですが、窒素関係の化学肥料等から塩酸性窒素というのが過剰になってるんだというふうなことで、飲料が不適だというふうなことを言われました。

そのことを、東京の会合で私が話しておりましたら、名古屋の近くの各務原という市がございます。名古屋の大平野の中の市ですが、その市長さんが、うちにその問題ではずっと前に大きな問題ができたんだと。ニンジン400haつくって、そうして盛んに方々へ送っておられる。ニンジンは今で言いますと、10kgが3,000円近くするともう左うちわだというふうなことを言っておいでしましたが、400町歩のニンジンを作っておったところの、地下水を新たに水源を求めるといってやりましたところが、硝酸性窒素が多くなって飲料水にも影響が出てき

そうで、大変だということになって、その原因を探すといって、徹底的に調査をいたしまして、やはりこれはニンジンに対する肥料のやりすぎだというふうな結論が出たわけですね。

そして、それを肥料を減らしていかないかということで、学問の先生方のご研究や、行政や、農業団体や、これらが一生懸命になってそれを減らす努力をして、ようやく現在は減ってきたと。10a当たり15kgぐらいの施肥量にしておられるというふうなことで、減ってきたということですね。

肱川町のその集落も、非常に農業の熱心なところなんです。ですから、人工の化学肥料とともに、また家畜糞尿等をやりましたも、やはり掃除をしまして水質に大きな影響が出てくる。ですから、うちの職員は非常に優秀なのがたくさんおられますので、この原因をすぐにそういうことになったら、それを克服する方法を考えればいいということで、今度は山の上へボーリングをして、山の上の水を取って給水しようということで、山の上へ水源を求めたわけですね。1回目は200m掘ったけどだめ、2回目には120mで出始めたということで、その水を現在給水をしております。

だから、水というのは非常に難しいわけですね。各地で温泉を掘っておられますが、うちも試掘をしまして、100何十mか掘りまして、ポコポコ出始めたので、これはよろしい、もうそれなら企業に送水するような掘り方にせなければいけない。水中ポンプがはめられるような大きさに掘らないけんということで、50cm離れて別の穴を掘ったわけですね。そしたら、最初に掘った穴より20m余計に掘ったのに、出ないわけなんですね。50cm離して掘っておるのに出ない。ですから、各地で温泉試掘で成功しておられることと、失敗しておられるところがありますが、これはやっぱり運が悪いか良いかということになる。非常に難しい。そういうふうな水というのは非常に難しいわけでございます。

ですからどうするかということ、いろいろ苦労してやっておられるわけでございますが、今言

いますように、いろんな化学物質というのが、登録されておるだけで1,200万種類あるそうです、世界中で。人工化学製品の物質が1,200万種類。そして実用されておるのが10万種類あるそうです。そういうものがいろんな影響を及ぼしてきます。

そしてゴミ。ゴミを燃やしたら、ああきれいになった、もう大丈夫と思われるかもしれませんが、私、中学時分に勉強しなれませんが、一つだけ覚えておることとがある。質量不変の法則というのがあるんですね。形は変わっても内容は変わらないんですよ。不変であると。それで空中へ飛んで行っても、空中へ違った形で残る。灰になって燃えて沈んでも違った形になって残る。それでゴミを燃やしたら灰に雨が降ります、そしたら下へ入ってしまいます。それがみな川へ集まる。ですから、今回のサミットのご挨拶の印刷物にも「川は人間の傲慢不遜な生活のすべてのツケを集めて流れている」というふうな表現しておられるわけでございますが、すべてが川に集まって流れて行くということになります。

有吉佐和子さんという方が『複合汚染』という本を書いておりますが、これはお読みになった方は多いと思いますけれども、あれを読みよりますと、どうしたらいいんだろうというような感じになりますね。あんまり神経質に考えたら、生きとることがもう難しなるような感じがするわけでございます。そういうことで、非常に何もかも難しいわけでございます。

うちの国道改良も、ほとんど全部できたんですが、ちょっとできとらんところがありまして、今そこをやっておりますが、こちらの方も主要道で改良をやっております。そうしますと、向こう岸の川縁の木を切らないようにしてくれというて、皆さんから要望が来るわけですね。私も景観上あったほうがええなとは思いますが、その木を残すことによったら、裏をどれだけ切らないかということになってきますと、何十倍、何百倍の経費が掛かるわけですね。ですから、まあその道路の向こうには

緑がいっぱいあるんじゃないかな、こらえてもろたらええが、というふうなことにもなってくるわけですね。

ですからなかなか全て、私、宇和町の人が保養センターへ見えまして、私の知ってる人がおられて、「町長ひとつ川や水についてちょっと話してくれんか」と言われるんで、「いやじゃけど」と言うたんじゃけど、やったんですが。そのときに、「川は金を掛けるほどだめになる」と言うたら、えらい拍手をもらうたんですけれども。これは金を掛けてもだめになる、かけなくてもだめになるわけですね。これは非常にこうしたら良くなるということがはつきり分らないわけですね。

ですから、非常に難しいわけでございますが、私は景観的にもいろいろなことを感じますけれども、最大公約数として良かれと思うことをやってきて、今日に至ってはおられるわけでございますけれども、今までの行き方の、豊かなことを求める、大きなことは良いことだ、ということはおもうやめたらどうかというのが、私の主張です。だから、町村合併もやめたらどうかというのが、私の主張です。

そういうことで、やっておりますが、いろんなことから川の心配をいたしておられて、私もちょっと神経質になっておられますが、一応、第1回はこれで。

鈴木

はい、どうもありがとうございました。

水量の減少だとか、いろいろな活動のために水質が変化しているということで、川がためになっているというふうなことを懸念されて、坂本さんも、大野さんも地元の方ですので、肱川に対する非常に思いが強いということで、時間オーバーして話していただきました。

引き続き、宮川村長の尾上様をお願いしたいと思います。尾上様はちょうど1週間前に初当選されて、初仕事ということで、わざわざ遠いところをお出でいただきまして、どうもありがとうございました。

宮川でのなんか取り組み等、参考になるかと

思いますので、ひとつよろしく願いいたします。



尾上武義（三重県宮川村長）

三重県の宮川村からやってまいりました尾上でございます。こちらのパネラーの紹介のところが空欄になっております。そういうふうなことで、ございますので、ひとつよろしく願いしたいと思います。

宮川での取り組みということでございますので、今からご紹介をさせていただきます。少しでも参考になればというふうに思います。

宮川村の位置なんですけども、紀伊半島の中央を大峰山脈が走っておりまして、その主峰であります大台ヶ原を源にして延々100km東流して、伊勢湾に注ぐ一級河川の宮川です。この流域に1市13町村が張り付いております。宮川はその最上流部にあるということなんですけど、この伊勢市を含むほかの12市町村に呼びかけまして、「宮川と共に生きる会」をつくらうよ。その中でいろんな流域の文化なりあるいは生活なり産業なり、交流もしながらもっといろんなことを向上させていこうじゃないかと。そういうようなことで会を結成をいたしました。平成9年の1月につくったわけでありまして。

その中で、環境フォーラムなり、あるいは河川の状況調査なり、あるいは環境クリーン作戦というようなことで、今年も伊勢市の一部河川で行ったわけなんですけど、そういうふうな主に啓発活動を中心に展開をしている、そんなところなんです。

この宮川が平成4年に建設省が発表いたしま

した全国の109の一級河川の水質調査で、日本一になりました。大変ありがたいことでございまして、当時の山本村長が早速水をつくれという話になりまして、水を一概につくれと言っても、全国に200ほど水の会社がございます、ここ（パネラーのテーブルの上）にも「六甲の水」というのがあるんですが、これらは最大手のようなんですが、そんなところへ参入してもどうもならんぞよというふうなことで、あつたんですけども、なんとしてもつくれというふうなことでして、当時40歳未満の若い人たち、宮川村では若い人なんですけど、27人が寄り集いまして、なんやかんや言いながら、農林水産省の補助金をいただいて、補助金といひましてもシイタケとかワサビというのは特用林産になるんですけど、水は特用林産にならないよということで、これまで例がないというふうなことでございました。

そやけど、水というのは山から育んでくる、そういう特用林産やないか、何とかそれでねばりまして、特用林産の特認事業で補助金いただきまして、それから元気してきました、村も補助金乗せまして、9割補助でその団体つくりまして、そこに補助金出して、やりました。

平成6年から営業始めたんですが、ネーミングは『森の番人』ということで、結構良い名前なんです。今日は実はこれ持って来たんですけど、ちょっと重たかったんで持って来なかった。それが残念なんですけど、そんなんで、営業を始めました。

そうしたら、その年が非常に干ばつでして、この四国あたりからも毎日大型トラックで水を持ちに来た、というようなことで、結構自然の影響を受けて、良いスタートが切れたんですね。

明くる平成7年の1月にはご存じの阪神大震災が起きました。8tの水をすぐに持って運びました。どうぞ使ってください、というようなことで持って運んだんです。まあ「小さな親切大きな下心」というのはあつたかも知れませんが、そんなんで、まずまず商売になっております。

ただ、その商売するだけでなしに、せっかくこういうような国や県、あるいは村からの補助金もいただいたということで、森と水を守る会という、そういう団体なんですけども、何とか恩返しをしたいというふうなこともございます。営業方法は宅配方式ですね。そういうことでやっております、大きく伸びませんし、大きく下がらないいうことで、この不況にもわりあい強い、そういうような会社でございますが、環境フォーラムをやったりとか、あるいは河川とかダム湖の清掃作業をやったりとかいうことで、頑張っております。

また合併浄化槽を設置されたお家にも、その1基について3万円を助成しようというふうなことで、頑張っております。そんなことしても会社こけてきやへんのかよ、ちゅうようなことで、だいぶ心配はしておるんですけど、まずまずもっておるようでございます。そういう活動を行っている、展開している団体でございます。

それから、環境条例というのをこの7月1日から施行いたしました。5本つくったんです。1本はこんなきれいなみんな育てるといふか、きれいな地域をつくっていこうよという、啓発型の条例なんです。後4本は、すべて罰金付の厳しい条例にさせていただきました。

一つは水道水源の保護条例ということで、その水源地の奥地に変な工場をつくらない、つくらせないよ、そういうような条例です。

もう一つはよくありますね、ゴミの投げ捨ての禁止条例。もうタバコほつてもいかん。つば吐いてもいかんというぐらい厳しい条例なんですけど。

それから、空き地の適正管理に関する条例。

もう一つが、キャンプ地の指定に関する条例ということですね。このことでちょっと検察庁のほうに協議に行きまして、先生方おっしゃるのには、国土を皆さん国民の人が使うのは自由やないかと。したがってそれを規制して、罰金をつけるというようなことは、もう絶対裁判になつても負けますよと。そら当たり前や、そうですね、というて帰つて来たんですけども、

それやつたらこの条例つくらずに、そのままおつても河川とかそういう環境を守れんやないか。もうこらこのまま強行しようということで、今年の3月議会にかけました。議会のご認識もいただきながら、その条例を施行させていただきました。

宮川村内に5カ所そのキャンプ地を指定をさせていただいて、そこには看板もつけたりしまして、トイレもございまして。そういうことでやりましたら、まあ大体その5カ所の指定地域でキャンプをしていただいているようです。

ただ、私どもはそれぐらい罰金付の厳しい条例でもつくって、もっときれいな宮川村をつくりたい、言うたら日本一美しいむらづくりをしたい、そんな思いでこの条例をつくらせていただきました。

宮川村に入って変なことをしているとちょっとうるさいよと、厳しいよと、そういうご認識をいただくとともに、当然よそへ行ったときに、自分もゴミを捨てないとか、国民みんながそういうような思いになってきたら、それこそすばらしいむらづくり、国づくりができていくやないか、そういう思いもございまして。そういうような環境条例をこの7月1日から施行したところであります。

それから、水を育むと言いますと、当然森林の整備というのが必要になってくるわけです。国や県からも間伐なんかの補助金をいただいてやっておるんですけど、村の単独事業で山を皆伐した後、もうあまり儲からないというので次も植林する金が回らないんですね。そのまま放置するという山もちょいちょい出てきました。ということで、それならということで、村のほうから補助金を出したりとか、あるいはフォレストファイターという第三セクターがあるんですけど、ここで山を管理している。そこに委託をして広葉樹を植えようよと、植えさしてくださいということで、イチヨウとかモミジとかコナラとか、そういうような広葉樹を植えながら、景観整備とともに水を育んでいこうよ。そういうような事業も展開をしております。

また、三重県の漁業組合連合会、県漁連なんですけれども、そこも「森は海の恋人」ということで、銘打ちまして、大体200人ずつぐらい各漁連が来るわけなんですけど、今年の3月14日にも知事さんも来て、1本植えてくれました。大体これまでに3haほど植えたんですが、モミジを中心にしながらやっております。これもお金をかけずに効果を上げていきたいというふうなことで、どんどん土地は提供するさけ、どんどん植えてくださいよということで、県漁連のほうにも言っておるんですが、そんなんで共同的に進めさせてもらっております。

この後、今年から公共下水道と合併処理浄化槽の整備にも入りました。これから大変なお金もいるわけなんですけど、そういう森林整備とあわせて水質も良くして、そしてまたプランクトンを含んだ水を伊勢湾へ送り込もう、そんなような思いで取り組んでおります。

来年は三重県の宮川村でこの全国川サミットが開催をされることになっております。どうぞ皆さん方もごぞつてご参加をいただきますように、お願いをいたしまして、私のコメントとさせていただきます。ありがとうございました。

鈴木

どうもありがとうございました。

水質日本一のお墨付を建設省からいただいた、それを契機に「宮川と共に生きる会」をつくられ、いわゆる環境条例だとか、あるいは森と水を守る運動、こういうものを活発に展開されている。非常にうらやましく思う次第でございます。どうもありがとうございました。

それでは一応、パネリストの皆様には予定した時間を大幅にオーバーしまして、いろんな思いを述べていただきまして、そういうお話の中で、次代に美しい川を残すということですけども、ただ、大野町長さんもおっしゃいましたように、川がだんだん汚くなっているんじゃないか。じゃあ汚くなった川をほっといて、あるいはこれを次代に残すわけにはいかないと思うわけですけども、パネリストの皆様のお話を聞きますと、なぜ川がそういうふうに変化し

てきているかと、こういうことを考えるときに、こういう川が変化している、あるいは荒廃している大きな原因というのは、やっぱり人々の関心が川から離れてきていると。昔は舟運に使ってた川が、道路が出来て、道路が出来たらもうその川も必要ないと。そういう状態でだんだん人々の関心が川から離れていったことが、美しい川をだんだん駄目にしていくと、こういうふうに考えられるわけでありまして。

そうすると、美しい川を取り戻すためには、あるいはこれを次代に引き継ごうとするためには、要するに河川へ人々の関心呼び戻すことが、これが基本だろうと、こう思います。

それから時間があまりございませんので、いかにして人々の関心を川に呼び戻すかということについて、この一点についてここではディスカッションしていきたいと思っております。

それで、まず大野町長さんに、ごく簡単に結構ですから、現在と昔ですね、町長さんが子供のころと、川との関わり方がどのように変化してるか、そういう点につきましてちょっとお話しいただけますでしょうか。

大野

これは私がお話しするまでもなく、皆さんが考えていただいたらわかるわけですが。人間が昔はどういう関わり合いをしていたか、運輸交通の役割をしておりましたから、そういう関わりをしておりました。これがやまりました。肱川町にも道路ができるまでは運漕業というのがあったんですよ。「うんそう」の「そう」は「漕」です。船が来りましたから。そういう運輸交通の関わりがなくなった。

それから、魚捕りも昔のように子供も一生懸命になって、母ちゃんにほめてもらおう、ぼんも手伝って帰ろうかというような捕り方をするあれはなくなりまして、趣味に当日来て捕りよる人が少しはおいでますけど。みんなの魚捕りの関わりの川ではなくなった。水車もなくなった、水泳もしなくなった。洗濯もしなくなった。

私の住んでおります地域は、台地でございまして、昔は水がなかったわけなんです。家内は水

のあるところから嫁に来ましたが、来てから腹が太かったり、背中に子供を背負うたりして、手提げのバケツを両方に下げて井戸から飲料水は汲んできよったんです。そして洗濯のときには井戸へ行ってやりよった。それからおしめを洗うときには川へ行ってやりよった。

そこが現在の私の犬の散歩のコースの一つですから、行くんですが、かつて洗濯しよったところはもうそんな状況ではないわけです。こないだ二、三週間前の俳句を見よりましたら「洗いの残る小川や小鳥来る」と、これは石手川の人がつくっておいでますね。良い俳句をつくっておいでます。うちのほうは「せせらぎを隠して葛の花見えず」もう葛の葉がいっぱい渡って、せせらぎの音はすれども、水は見えず、花も見えないというような状況でございまして、非常に都市と山村の荒廃の違いを私は思うわけでございます。

そういうことで、関わりはもう全部なくなって、ただ関わりが一つあるのは、飲料水であります。飲料水も私はよくなくてはいけないと思っておりますよ。さっきお話ししましたが、この飲料水に関わっておるといっても、これは公共に関わっておる。個人個人が飲料水に関わっておるんじゃない、水に関わっておるんじゃない。公共が引っ張り上げて配って、銭もろうて供給しよるといふような関わり。

ですから、水との関わりはほとんどなくなっておると言えるわけです。ですから、これはいろんな関わりがなくなっておることを、あるようにするにはどうしたらいいかということを考えて、やっていけばいいんじゃないか。

鈴木

はい、どうもありがとうございました。

昔は草刈りでも、川と非常に関わりがあったわけで、皆さん草刈りをして、川もきれいだったわけですけども、そういう昔ほど、あるいはほとんど関わりがなくなっているということが、非常に川が荒廃している原因ではないかという。

大野

農林業が駄目になると川の水も駄目になると

思うんですよ。それで今言いました洗濯をうちの嫁さんが行きよったところを、コースですが、行くのに今年も私は鎌を3べん下げて行って、草をずっと払いながら道開けをしていったんですよ。ですから、川へ行く道がなくなりよる。山へ行く道がなくなりよる。それで、関わりが深まるわけがないです。

鈴木

どうもありがとうございました。

そういうふうに関わり合いがなくなっているのを、いかに取り戻すかということ、それぞれの立場からごく簡単にお話しいただければと思うんですけども、四国地建の河川部長の佐藤さん、いかがでしょうか。

佐藤

だいたひシナリオと変わってきたんで……。今皆さん川を美しいと思っている人はほとんどいないと思っております。実はさっき宮村先生は芭蕉の俳句をご紹介いただきましたけど、万葉集、古今集、新古今集、江戸小唄、そして現代歌謡と、この中に歌われてる水に関する形容詞、これを1回調べたことがあります。

万葉、古今の時代はかなり肯定的な形容詞、水とか川に対して、例えば、速いだとか、清いだとか、現代語で言うところこういう言葉を歌に託してる。皆さんが夜カラオケで歌う現代歌謡曲、辛いだ、悲しいだ、その思いを全部水に捨てると。我々の今の文化が川を美しいもんだと思う心を持つ、そういう大人、私もそうですが、それが一番の問題じゃないかと。

3つ提案があります。川で汗を流しましょう。これが1点。大人も子供も川が怖いもんだ、そして汗を流すことによって、自然と対峙する。そして、具体的に言うと水防体験、水防作業の体験をやはり継承していかなくやいかんだろうと。自らのことは自ら守るという体験を地域社会の中でももう少し活かしていただく。これが1点。

2点目、恩地日出夫という監督がおります。彼が中心になって今日本の原風景を映像に撮る会と、このまま残すのはもう日本の原風景として後世の世代に残すのはあり得ないだろうと、

せいぜい映像で残そうという活動を今やっております。もうすぐ撮影に入るはずですが、残念ながら四国ではなくて東北に取られてしまいました。山形で撮影に入るはずですが。

皆さんの中でも、せめてそのまま残さないんであれば、何か文化として映像なり、あるいは詩なり、こういう形で残すと、こういうことをやっていただけると。これは2点目。

3点目、川の中でレッドデータブックだ、絶滅危惧種だ、いろんな指定がございます。あの魚が少なくなった。ぜひどこかの自治体でやっていただきたいんですが、川の中の絶滅危惧種に子供を指定していただきたい。今全国でそういう運動を少しずつ始まっています。水ガキが減っていると。水の中で遊ぶガキが減っていると。大人がついて行かないでも遊べるガキが水の中にいるかどうか。数えてみると、ほとんど皆さんの自治体では絶滅危惧種です。そういう指定をどこかしていただければと。以上でございます。

鈴木

どうもありがとうございました。

水防作業等を見直したらどうかと。それから日本の原風景、川についても文化の形で残せないもんだらうか。あるいはもう一つは、子供を川にどんどん連れて行こうという、3つのご提案でございました。どうもありがとうございました。

それでは愛媛県の土木部長の山本さんのご提言、お願いいたします。

山本

ちょっと佐藤さんと重複するところがあるかもしれませんが、私も長く河川行政に携わっておりますけれども、どんな川が川らしい川かなというのを、常々考えるんですけど、自分なりに考えてみると、2つに集約できるんじゃないかと思うんですけど。

1つは、やはり生物、特に魚ですけども、これが多く住んでいるということ。それからもう1つは、人、特に子供さんですね、それが川という、高水敷じゃなくて水の中に入って遊んで

ると、遊ぶことが出来るということでもありませんけども。この2つというのが突き詰めて考えればしっかりあれば、川らしい川というのが残っていくんじゃないかというふうに考えます。

私ども、河川行政やるに当たっては、そういうことを常に頭に置いてやりたいと思うんですけども。これはやはり先ほどから大野町長さんも言っておられますけども、なかなか川と言いますか河川行政だけではなかなか難しいところがあるわけですけども。河川サイドとして出来ることをやろうということで、2つ今最近ちょっと考えております。

1つは、ふるさとの川づくり事業ということで、ネーミングそのものはあまり珍しくないんですが、今度の9月議会にも予算承認もらったんですけども、特に河川環境整備の一環なんですけども、一つの例として、昔からお祭りの御輿を川の中で御祓をやってた、それが水が汚くなり、また護岸なんか整備されて川の中に下りにくくなった。なんとかそれを、もう20年くらいになるんだけど、復活したいんだがというような話があります。まあ良い話ですんで、川に下りられるように何とか考えましょうというような話をします。

そうすると、今度は一方で、じゃあ水質も何とかしようというようなことに、どんどんどん輪が広がってくる。そういう川とつながりのあるような、そういったところをしっかりと見つけて、そういったところを手助けしよう。

例えば、この付近でもありますが、難流流とか、それから川の中で一生懸命子供が遊んでるようなところもあります。そういったところに川を下りやすくしようとか。そういったことを考えようと思います。ただ、例えば川で遊んでるようなところを、必要以上にはいじくりたくない。とにかく川に下りやすくさえてあげれば、もうそれ以降は自然ですから、自然に任せるといような。従来、ともすれば行政のほうでそれをさらに過度に高水敷も整備しましょう、護岸も整備しましょうというやりすぎの面もあったわけです。そういったことにならない

ように考えたい、というのがふるさとの川づくり事業です。

もう一つは、ソフト的にこれは河川だけでなく、道路でも今話が盛んに出ておるんですけども、里親制度というのがあります。こういったのを取り入れたい。何かと申しますと、従来、河川なり道路の管理というのは、あまりにも行政がやりすぎるものですから、行政としても手も足りない、お金も足りない、一方では住民の方の関心も全然離れてしまう。これじゃあいけないということで、ある区間をそれぞれ決めまして、その区間を地域の住民の方なり、あるいは周辺にある企業の方なりに管理、管理と言いましてもきれいにする責任を負っていただく。

そのかわり、この管理をするに当たっては、きちんとこのところは何か地区の方々の管理ですと、何か企業の管理です、そういったことをしっかりうたい出して広くアピールしていこう、そういった程度であるわけですけども、要するに里親制度ということで、その区域を親代わりになって面倒みると、こういったことで関心を持っていただこうということで、今考えております。

これは先進地はほかにもあるわけですけども、当愛媛県におきましても、そういったことを考えていきたいというふうに思っております。以上でございます。

鈴木

ありがとうございました。

ふるさとの川づくり事業ということで、昔の神事なんかを川でやっていただくとか、あるいは河川の里親制度、こういう新しい提案がございました。非常に参考になりました。

先ほどから子供を水の中で遊ばせ、というふうな話が出てまいりましたけども、永江さん、この点に関していかがでしょうか。

永江

確かに絶滅危惧種ですよ。でも絶滅危惧種は最近出たわけではなくて、実は私もそのいい例だと思ってるんですけど、私自身実は子供のときから川で泳いだこともなければ、川の魚を

すくったことも釣ったこともありません。

そういう親が育てるんですから、これ大変なことなんですよ。ですから、どうすればもっと川に親しめるような子供ができるか、あるいはそういうふうな環境づくりができるかと考えてみますと、今、川って楽しい場所というより恐ろしい場所というイメージが強いんじゃないか、恐ろしいというか、入ってはいけない場所、みたいな感じがあるんですよ。柵があったりとか、危険とか書いてあったりとかね。

なんとか、サイレンが鳴ったらどうこうしなさい、みだいな看板がいっぱい立ってあったりしまして、使って下さいという看板はあんまり見たことがないですよ。こうやって遊びましょうね、なんていうのはないような気がするんですよ。

大体、川で泳いではいけないっていう教育を今の子は受けてるんじゃないかと思うんですね、危ないから。だから、川のすぐそばにある小学校でもプールを持ってたりするところがありまして、ですからどうしたらいいのかなと思いましたが、まずどうぞ来てくださいというような雰囲気のある川をつくることだと思うんですよ。

すぐ下りて行けるような、水のところまで。今コンクリートで絶壁ですよ。下りて行けない。だから、そういう優しい水辺をつくるということと、来てもいいんだよというような水辺をつくることと、あと、来たときにどうやって遊ぶかというノウハウを、親と子供に教えることだと思うんですよ。

この夏、私実はキャンプ、一般に公募されるキャンプ、どんなものがあるかというのを、ちょっとレポートしようと思ひまして、一応、分かる範囲で調べてみたんですけど、島でキャンプをしようという呼びかけは結構多いんですね、各自治体が参加を呼びかけているのがあるんですけど。川でキャンプというのは意外に少なかったんですね。水源地まで行ってみましょうよ。探検して見ましょうよ。というのが、地元の子供向けにはやってるんですけども、

町の子向けにと言いましょか、一般的に公募してるのが、すごく少なかったことが大変残念でして。そういう場をつくるということも、川に親しむ人種をつくる一つの手ではないかなと思ったりいたします。

宮村先生のホタルのやけどじゃないですけどもね、ほとんどどうやっていいか分かってないと思います。

鈴木

はい、ありがとうございました。

河川行政も従来の治水・利水から、ちょっと変わってきてるように私は思うんですけども、今の永江さんの、もう少し川に親しめるような川づくりをしてほしいということなんですけども、佐藤さんか山本さん、どちらかでも、あるいは両方でもいいんですけども、その点についてちょっとコメントいただけますか。最近の河川、環境に対する考え方というんですけど。

佐藤

例えば、永江さんが川に親しめる川にというお話がある。ある方は、そこで魚がたくさんいてほしいという方もいる。あるいは同じところで水をもっときれいにしてほしい、水量を多くしたほうがいい。あるいはもっと周辺の緑とマッチした川にしてほしい。いろんな思いが最近特にいろんな方々から寄せられると。

今回河川法を変えた枠組みというのは、いろんな人の思いがやはり一つ一つ全部応えられないと、あえて申し上げます。水が美しくして魚を増やせというのは、まず無理な話です。水の中に栄養分がないと魚は数が増えていかないと。そうやってきたら、じゃあこのへんはこのくらいいいんじゃないかなとか、少しずついろんな方々が知恵を出して、建設省の知恵も出し、県の知恵も出し、自治体の知恵も出し、住民の方の知恵を出して、そしてただここはみんな少しずつ我慢しようじゃないかと。そして、みんなで川を見ていこうと。

あえて申し上げますと、今度の法律を変えた意味は、一人一人が持っている情報、あるいは思い、これをやはり川の中に生かせるような枠

組みをつくりたいと。それもまたみんなに一人一人にフィードバックされて、その計画づくりだけじゃなくて、後の川を見つめるというところまで一人一人が参画していくと。これが今回の河川法の改正の発端の原点でございます。自分自身実作業に関わって、いろいろ苦しかったんですけど、原点はもうそこしなかないだらうというふうに考えております。

鈴木

ありがとうございました。

河川法は平成9年度に改正されまして、環境というのが本格的に河川事業の中に取り入れられ、その中には住民の意見を聞いて環境整備を行いたいと、こういうふうなお話でございます。

もう一つ、坂本さんにお聞きしたいんですけども、人々を河川に惹きつけるということで、いろんなイベントもなさってますですね。その中で流域文化の継承と創生とかいうふうなお話がチラッとあったと思うんですけども、そこらへんについてちょっとコメントいただけますか。

坂本

はい、流域文化の継承とか、次世代に残すために流域文化をどうやっていくかということに対してなんですけど。もう一つ前に、この前建設省の方がパネリストの方々と、ちょっと話が違うんですけども、夕食会を設けさせていただいた。そのときに、建設省の四国地建の河川部長の佐藤さんが「もしも肱川がなかったらどがいにするぞ」と言われた、「うーん、どがいなんじゃろ。こんなサミット考えんでもよかったじゃな」と思ったんですけど。いろいろ考える必要もなかったがなと。

だけど、僕が肱川でずっと育ったからには、僕の血液の水は全部肱川の水で育ちましたんで、僕の体の中には全部肱川があったんやなと思って、いろいろ思ったことがあるんですけど。もし皆さんも一度、ぜひ肱川がなかったときに私たちの生活がどうだったのかというて、逆の発想もしていただいたら、ちょっと思いが深まるかなと思うようなところもあります。

そして、僕が一つ流域文化とか流域のネット

ワークの形成の一つの案としまして、多分市町村の至る所に水質の悪いとことか、水流の少ないとことかいろいろあると思うんです。そこを競って1市11町2村の方々と、水質いまpHが幾らだとか、BODが幾らだとか、現状を測って、それからだんだんと良くなっていく過程をグラフにでも書いて、私どもの町はこんなによくなったよ、とかいうのでつながりを持っていただいて、それで流域全体を発展していけるような、そういうふうな流域づくりというのが、僕はまず最初やっていけたらと思います。

そして、現状を把握しないで今の肱川の現状を把握しないで、次世代に残すかという、そういう考え方もあるんですけど、やはり今の川がほんとにどれだけ汚れてるのか、どれだけ汚いのか、水量が昔からどれだけ少ないのか、というのを皆さん本当にご存じない方がたくさんいるさ思うんです。それを自分の手で、建設省に行ったらこんなにトマス紙みたいなのがたくさんありまして、行ったらすぐもらえると思うんですけど、いただけますかね。

そういったもので皆さんが水質を測ることによって、肱川と接して行ったりとか、そういうもので現状を認識していくというのが、僕は一番最初していき、だから河川がきれいになった、だから泳いでみようか、とかいうようなことも出来るんじゃないかな。そうしたことで少しずつ文化が、今全然昔の河川の文化、先ほどの町長が言われたように、河川は交通手段の一つでしたのが、それが道路に変わった。

道路に変わって当たり前です。道路のほうが便利がいいんですから。河川から離れていくんも、河川の栄枯盛衰みたいな形がありまして、だけど、次世代に残すためには、やっぱり少し

ずつでも河川のことを知って、今の現状を把握しないで次の次世代の河川はないような気がします。以上です。

鈴木

どうもありがとうございました。

大変短い時間でいろんな議論が出ました。ただ、美しい川を取り戻して次代に継ぐためには、いかにして人々を川にもう一度呼び戻せるかということで、短い議論でありましたけども、水防団活動を見直したらどうかとか、あるいは河川里親制度とか、あるいはふるさとの川づくり事業、こういう事業を進めるとか、子供を川の中に戻すためには、利用しやすい河川環境整備を望むだとか、それから流域の文化、こういうふうなものを大切にして、河川に目を向けさせ。いろいろな具体的な提案がございました。

それぞれ非常に難しい問題ですけども、これの具体的な提案を実行することによって、地道に実行することによって、人々を関心を肱川へ呼び戻すことができる。ひいては生活に密着した美しい川を取り戻して次代に引き継ぐことができると、こういうふうな思いをいたしました。

時間がまいりましたので、これで終わりたいと思いますけれども、来るべき21世紀というのは、自然との共生というものが人類の課題となると言われております。まさに河川との共生というのが、まさにその自然との共生そのものであるかと私は思います。

本日の討論では、河川との共生を考える上で何がしかの示唆があったんじゃないかと思いません。時間がまいりましたのでパネルディスカッションはこれで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 鈴木教授、どうもありがとうございました。パネラーの皆様方もどうもありがとうございました。鈴木教授とパネラーの皆様方にもう一度大きな拍手をお送りいただきたいと思います。存じます。

どうもありがとうございました。

〔宣言文〕

第8回全国川サミットin肱川宣言文

私たちは、四国山脈の西のはずれに源を発し、いくつもの支流を集め瀬戸内海に注ぐ北四国最大の河川「肱川」のほとりに集い、「21世紀へのメッセージ“それは川から始まる”」を総合テーマに第8回「全国川サミットin肱川」を開催しました。

川は昔からその流域に住む人々に様々な恵みを与え、豊かな暮らしと文化を育んできました。しかし、近年の川を取り巻く環境は、効率優先、経済偏重の考え方から、環境資源の荒廃や都市と農山村の経済格差の拡大、流域の意思の隔たり等、様々な問題や社会の歪みが生じてきています。

このことを踏まえ、今回のサミットでは、21世紀に向けたあるべき自然との共生や、地域社会及び流域のよりよい関係づくりについて話し合いました。

そして、「全国川サミットin肱川」を記念し、全国の川を愛する人々とのさらなる交流と、美しい川が次世代に引き継がれることを願って、次のことを宣言します。

1. 豊かな自然や美しい川を大切に、水を育む森を守り、川を活かした町づくりを進めます。
1. 川の豊かさ厳しさを歴史から学び、自然と調和した災害に強い町づくりを進めます。
1. 川によって培われた潤いのある生活、文化を次世代に引き継ぎます。
1. 川を通して流域の人々と交流を深め、よりよい地域づくりを進めます。
1. 美しい水と緑の国土をつくるため、全国の川を愛する人々と友好を深めます。

平成11年10月16日

第8回全国川サミットin肱川参加者一同

代表 肱川町長 大野 和

〔次年度開催地挨拶〕



三重県宮川村長

尾上 武義

失礼をいたします。私も昨年、宮崎県の北川町、そして、今年の肱川町ということで、訪れさせていただきまして、いろいろと勉強させていただきました。

川への思い、あるいはそれに関わる森林の整備等、いろいろ勉強させていただいたところであります。来年はいよいよ三重県の宮川村で開催をいたします。人口4,092名ということで、高齢化率も36.8%、非常に高齢化の進んだ村でもあります。まして面積も三重県の一番広い307.54km²ということで、その森林面積も96%が森林で占めておるといような村でございます。

しかしながら先ほどからも申し上げましたように、いろんな面でそれなりに元気をして頑張っている村でもございます。どうぞ来年の第9回全国川サミットin宮川には、皆様こそってお出でをいただきますように、お願いをいたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。よろしく申し上げます。



〔閉会宣言〕



肱川町収入役
中野博司

本日は北海道から九州まで、全国各地からお越しいただきました自治体各位の皆様をはじめ、肱川流域から大勢の方々のご参加をいただきまして、ありがとうございます。

またシンポジウムにおきましては、それぞれのお立場から貴重なご意見、ご提言を賜りまして、ありがとうございました。これを契機といたしまして、21世紀に向かって自然との共生、都市と農山村、また流域のより良い関係づくりに取り組んでまいりたいと思います。

今後ともよろしくむお願い申し上げまして、第8回全国川サミットin肱川・シンポジウムを閉会いたします。ありがとうございました。

〔参考資料〕

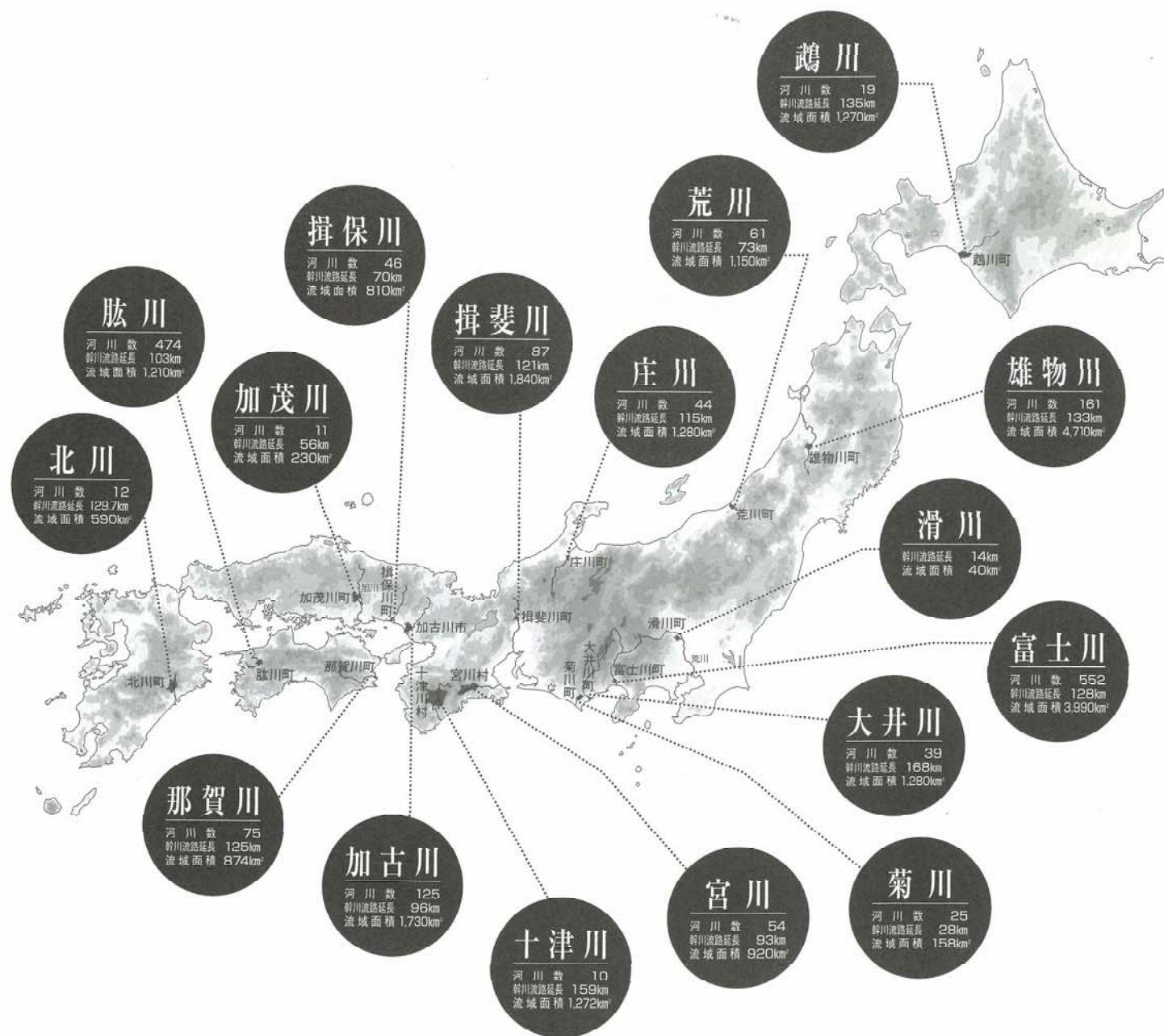
参加自治体17の河川

フォトコンテスト、作文、エッセイ入賞者

新聞記事

参加自治体17の河川

JAPAN'S RIVER SUMMIT in HIJIKAWA



第8回「全国・川サミット」

10月16日、喜多郡・肱川町で

第8回「全国・川サミット」が10月16日、喜多郡・肱川町で開かれる。「母な文・論文の表彰式(17時10分)」「川を保全しよう」とする意欲的な市町村が集まって「川を守る具体的な方法」を話し合う「首脳会議」がある。今回は全国各地から計十七市町村が参加を予定している。(過去最多は二十市町村) 参加無料(定員四百人) 希望者は早めに肱川町役場へ申し込むこと。

会場は同町立・中野小学校体育館。日程次の通り。
開会(13時30分)▼スライドで参加自治体紹介(14時)▼川の原簿・整備事業を発表(14時30分)▼基調講演(14時30分)講師は関東学院大学教授の宮村忠さんで演題が「川と、このかわしもや月の友(芭蕉)」

10月17日には

ボートレース

肱川町は全国・川のサミット開催を記念して10月17日午前八時から鹿野川湖で、前入気上々。にぎわいでドラゴンボート大会を開く(小雨決行)。ドラゴンの飾りをつけたボート(10人乗りで、こぎ手8人)のこぎ比べ。日ごろは波一つない鹿野川湖に、ドラゴン型のボートが荒々しく水しぶきを上げるわけが行われる。

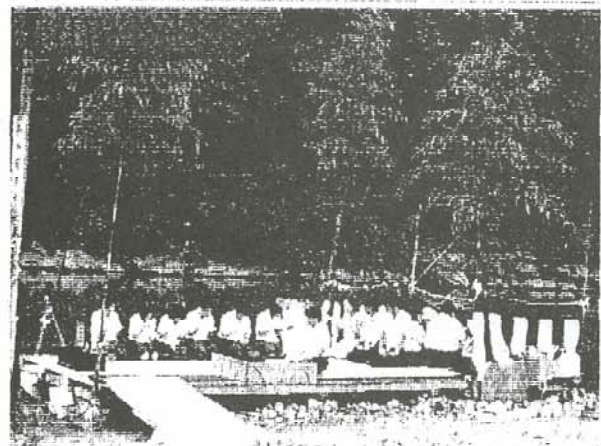
深い緑に囲まれた

川の上で「お茶会」

大洲高・肱川分校生が接待

肱川町で去る10日、「肱野だて、民謡、肱川後(イ川を語る夕べ)」が開かれ、カダ、流し唄、などムーンにぎわった。同町で下月、カダ師の山中美茂さん(三句)に開かれる「全国・川サミット」の関連事業の一つとして、野松雄さんが、肱川と後と

「私」と題して対談した。会場の高砂河原に集まった人々を風流な「野だて(左の写真)」で接待した。は大洲高校・肱川分校(齊藤泰武教頭)の四年生を除く三十九人。去る四月の生徒会で、「肱川を語る夕べ」への協力について話し合い、風流な「お茶会」を用いた。さつそく、大洲市在住の茶道家・藤岡寿子さんの指導を受け、約六カ月間、練習を重ねたのである。晴れ舞台は、肱川の水上を組んだ。深い緑に包まれた肱川の流れの上で、せせらぎを聞きながら、静かな服を「お茶会」に合わせた。お点前、の接待に、来賓たちも大満足の風情だった。斉藤教頭の話 現在の教育は自然の中での豊かな心の体験があまりにもおろそかにされてきた。肱川町の美しい山や川の中で心豊かなひとときを体験することも必要だ。と思う。これから教育の現場で大切にしていきたい。



第8回 全国川サミットin肱川

フォトコンテスト、作文、エッセイ入賞者

「全国川サミットin肱川」フォトコンテスト 入選作品

最優秀賞	「永久の流れ」	向井 健敏	(愛媛県松山市)
特選	「投網漁」	松村 吉三良	(愛媛県八幡浜市)
準特選	「花咲く流れ」	大久保ヒロミ	(愛媛県上浮穴郡小田町)
佳作	「肱川の源流」	高橋 政雄	(愛媛県大洲市)
	「十津川筏」	温井 利一	(奈良県吉野郡十津川村)
	「薫風」	亀崎 巽	(愛媛県伊予郡中山町)
	「雪化粧」	大久保 重義	(愛媛県八幡浜市)
	「雨の河辺川」	佐久保 恵一	(愛媛県喜多郡肱川町)
	「初夏の四万十川」	乗松 賢二	(愛媛県松山市)
	「水中鯉のぼり」	藤堂 三郎	(愛媛県西宇和郡保内町)
	「雨を下る」	兵頭 茂	(愛媛県喜多郡肱川町)

「全国川サミットin肱川」作文 入選作品

最優秀賞	「自慢の川・肱川」	竹上 千映	(大洲市立 菅田小学校)
優秀賞	「肱川を守ろう」	岡村 菜摘子	(肱川町立 大谷小学校)
佳作	「思い出の魚つり」	黒田 利信	(肱川町立 正山小学校)
	「僕の好きな川、肱川」	大野 拓朗	(肱川町立 予子林小学校)
	「肱川、大好きです」	大森 喜美代	(肱川町立 予子林小学校)
	「自まんの川に」	永田 裕香	(肱川町立 正山小学校)
	「水生生物調査をして」	坪井 直美	(肱川町立 中野小学校)
	「川の美しさ」	富岡 宏健	(大洲市立 肱東中学校)

「全国川サミットin肱川」エッセイ 入選作品

優秀賞	「慈愛の循環」	山崎 あずさ	(愛媛県大洲市)
佳作	「川の大冒険」	吉村 祐子	(愛媛県喜多郡内子町)
	「川と精神安定」	勝矢 光信	(東京都江戸川区)
	「筑後川」	山口 彰子	(愛媛県松山市)
	「川」	山崎 ふみか	(愛媛県松山市)
	「遠賀川」	毛利 嘉之	(広島県廿日市市)
	「肱川が泣いている」	畑川 傳明	(大阪府八尾市)

「川生かし町づくり」

全国17市町村 肱川でサミット

人とのかかわり探る

「第八回全国川サミット」(同サミット連絡協議会、喜多郡肱川町主催)が十五日から三日間の日程で同町で開かれており、メインの十六日は同町立中野小学校でシンポジウムを開催。川と人とのかかわり方などについて考えた。

サミットは、全国から一級河川名と同名の市町村十七自治体が集い、川への理解を深めるのが目的。シンポジウムには、加盟自治体や河川行政、流域関係者ら約五百人が出席。このうち、県外からは十六市町村、約七十人が来町した。

「美しい川を次代に引き継ぐために」と題したパネルディスカッションでは、佐藤直良(四国地建河川局長)や大野町長ら六人がパネリストとして参加。

治水や水資源確保など河川行政施策が紹介される一方、「家族が共に親しめる川」「町づくりと川とのかかわり」から「自然を学ぶ場として川は重要」「肱川を媒体にネットワークづくりを」まで、幅広い提言があった。環境条例制定や、川整備などを求めた。

この後、サミット関連事業として募集した作文や論文の上位入賞者を表彰。美しい川を大切に、川を生かした町づくりを進めることなど五項目のサミット宣言を採択した。

10月17日(日) 愛媛新聞

美しい川を取り戻し、次世代に引き継ぐ方策などについて話し合ったパネルディスカッション



サミット連絡協議会会長を務める大野和肱川町長が「川は人々にとって大きな役割を果たしてきたが、課題も多い。サミットを今後

喜多郡肱川町で開かれる「全国川サミット」で、高砂河原から約一キロのPRの一環として、肱川町などは十日「肱川を語る夕べ」を同町宇和川の高砂河原で開く。かつて肱川の風物詩だった筏(いかだ)下りを復活。トークショーもある。

肱川に対する理解を深め、川の将来について考えるのが狙い。筏下りは午後三時から。元筏師らの協力で長さ三・五メートルと筏と私と」がある。肱川増水時は筏下り中止。問い合わせは町風おこし課電話0893(34)2311。

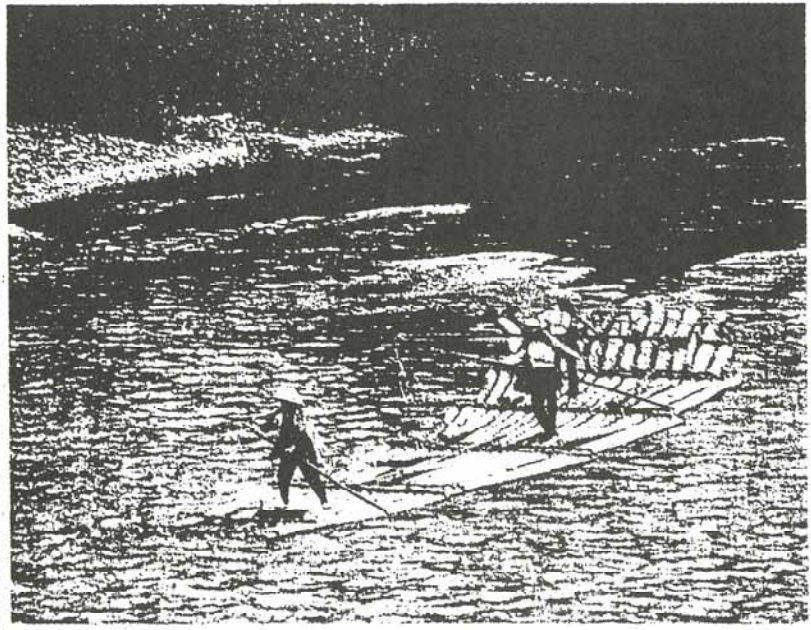
肱川名物筏下り復活

川サミットPR
トークショーも

9月9日(木) 愛媛新聞

蓑笠姿で流れに乗って

肱川町で「語る夕べ」 半世紀ぶり筏流し再現



山中さんら3人が乗り込み、半世紀ぶりに再現された肱川本流の筏流し

喜多郡肱川町宇和川の肱川河原を会場に十日、「肱川を語る夕べ」(同町など主催)があり、約半世紀ぶりに往年の筏(いかだ)流しが再現された。またトークショーや神楽など多彩な催しがあった。

午後三時半、山中さんら三人が蓑笠(みのかさ)姿で乗り込み、会場の河原を出発。約一キロを下った。沿道の見物客が往年の風物詩をなつかしみ、写真に収めていた。

会場では、大洲高校肱川分校が川岸から川の中に伸ばした特設舞台を設け、同校茶道部員が抹茶を接待。

と私と」と題して講話。同町山鳥坂地区の「鎮魂(しめ)神楽」も上演された。後半は小雨が交じる天候だったが、参加者はスタッフ手作りのいもたきやアユ入り雑炊などをほおばりながら、宴(うたげ)を満喫していた。

9月12日(日) 愛媛新聞

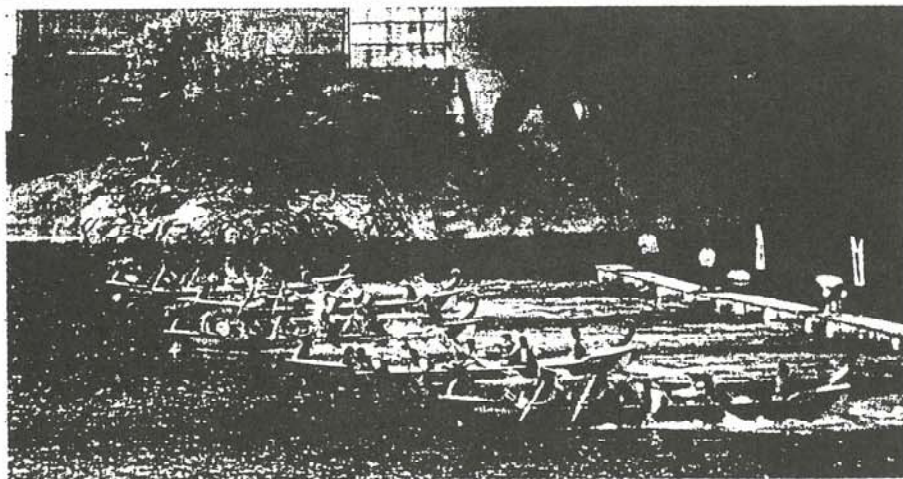
かしぼってこいで熱戦

鹿野川ダム湖でドラゴンボート大会

府中湖ペーロン(坂出)V

喜多郡肱川町の鹿野川ダム湖で十七日、「第五回風おこしドラゴンボート大会」(大会実行委、町主催)があり、町内外から参加した二十四チーム、三百四十人が熱戦を繰り広げた。

今年の大会は、同町を会場に開かれた全国川サミットの一環として開催。坂出市から宇和島市まで最多参加となり、同時に行っていた手こぎの部は除いた。レースは船首に竜をかたどったボートにこぎ手八



鹿野川ダム湖でレースを展開する選手たち

人、かじ取り、太鼓による展開した。上位入賞は次のチーム(カッコ内は市町村名)。

①府中湖ペーロン(坂出) ②松山市役所(松山) ③オールド予子林(肱川) ④オールブラックス(宇和島) ⑤川上商工会青年部(肱川)

人、かじ取り、太鼓による展開した。上位入賞は次のチーム(カッコ内は市町村名)。

①府中湖ペーロン(坂出) ②松山市役所(松山) ③オールド予子林(肱川) ④オールブラックス(宇和島) ⑤川上商工会青年部(肱川)

10月20日(水) 愛媛新聞